

「有るから拾ふのぢやありませんか、然し」と雪子は改まつて「あなた、玉子が家の子といふことを何うしてお知りになりました」

「それが不思議です、赤兒ちゃんのお目が實に酷く翠波の妻君に似て居るのです」

耐軒は不圖口を滑らせて、

「あッ失策だ」と思つた、それはもう遅かつた、雪子の顔が心持ち引き締つて、

「翠波さんの奥さんと云ひますと……」

「えゝ、其の何ですよ、最も今は何處かへ姿を消して居るんですがね」

耐軒は曖昧な言を云つて、鋭い問ひから逃れやうと試みたが、それは何の効もなかつた、

雪子は進んで、

「住江さんに似て居るのですか」と訊いた。

「爾うです、住江さんの目に似て居ます」

「へえ」と雪子は惘れた顔をしたが「あなた、被がわたしの家の小兒だと云ふことを何うしてお知りになりました」

「お乳母さんに訊ねたのです、と云ふのはあまり酷く住江さんに似て居たからです、もしかしたら行方の知れない住江さんの舉んだ子ぢやないかと思ひましてね」

耐軒の答へは苦しさうであつた。禿げあがつた額から膏汗がざらざら光つた。

(三)

玉子の目が住江に酷く似て居るといふ事が、どんなに強く雪子の胸を衝いたであらう、黙つて膝の上へ目を落して、赤兒を拾つた當時の記憶を辿つて見た。

然し、いかに考へても、住江の舉んだ小供があんな處に捨てゝある筈がない、それに皆が良人に似て居ると云ふ評判を立てゝ居る、他人の空似といふのであらうが、何處かに、良人の面影を持つて居るらしくわたしにも思へて居る、それに耐軒は住江の目に似て居るそれが不思議さに、わざ／＼乳母に訊ねたと云ふ、もし他の者の云ふ如く、良人に似た面影が何處かにあり、住江に似た眼を持つて居るといふのであつたら、玉子は良人と住江と

の間に舉れた小供ちやなからうか、と斯う思ひ至つたとき、雪子は息の根も止まるほどに驚いた。

それは、清野と住江との間に、何か暗い關係でもある如く云ひ觸らして居たことを、彼女が薄々聞いたことがあるからであつた。最も二三年前の事で、陽炎のやうな取り止めのない噂ではあつたが、その事を聞いた後暫くは清野に好い顔を見せなかつた、何かの前後には當付がましい厭なことを云つた、清野の歸りが一寸でも遅くなると「住江さんの許へお出でになつて居たのでせう」と露骨に嫉妬の醜態も投げて見た。

その當時は住江の噂が暴風雨になつて、清野の家庭に大動搖を來したことがあつた、雪子はその事を思ひ出した。

「するとわたしは良人と住江との間に舉きた子を自分の子にして育てゝ居るんだ」

結局にはこんな事も思へて來た。

「もし爾うだつたら何うしやう、こんな結らないことはありやしない」

急に世の中が顛覆するやうに思つても見たが、まさか仿なく耐軒にそんな色を見せること

は爲きぬので、

「そんなに酷く似て居ますの」とまづ何氣無く訊いた。

「わたしの僻目か知れませんが、何方かと云ふと、十度の老眼鏡を掛けて、まだ少々覺束ないほど確な眼を持つて居るのですからねえ」

耐軒は笑ひに紛らして終はうと思つた、詰らぬ事に引き掛つて、嫉妬の渦に巻き込まれては大變だとの恐れも出た。

「けれど時任さん、玉子は清野に似てゐるつて評判ですよ、十人が十人、誰も爾う云はないものはありませんよ」

「爾うですかねえ」

「あなたには爾うしたお感じが出なかつたのですか」

「さう被仰ると、清野さんに似たところがありましたかねえ」

「何方に似て居るのか、判然したことを被仰つて下さいよ」

「それが何うも、何しろ十度の老眼鏡で、まだ物足りないやうな眼力を持つて居るんです

からね、判然お答へすることは爲きませんが、いや宜しい、それではまた出直します、そして今度は八度ほどの眼鏡をもつて、篤とお嬢さんを鑑定させう、何方に似て居ても、所謂他人の空似ではありませうが、わたしとしても見定めて置きたいと思ひもします」

「改めてお來で下さるには及びません、それで住江さんは當時何方に在らつしやるのでございませう」

「それが分りません、何しろ去年の十月二十五日、無斷で家出をしたきり歸つて來ないのです」

「まあ、何うなすつたのでせうかね」

「何うも變です、その爲めにわたくし其まで非常に迷惑を感じて居ます、そこへ住江さんに似た赤兒ちゃんを見たものですから……それがお宅のお嬢さんだと聞いたものですから若やと思つてお訊ねに參つたのですが、さう云ふ事なら別に不思議はありません、どうも飛んだお邪魔をしました、どうか清野さんにも宜しく被仰つて下さい、何れまた改めて参りはしますが……」

耐軒が逃げるやうに起たうとするのを、雪子は、

「ちよつとお待ち下さい、まだお訊ねしたい事があります」と云つて止めた。

(三三)

耐軒は一たん起ちかけた腰を下して、不安らしい目を雪子に向けた、雪子は最初持つて居た笑顔を、いつの間にか影も見えぬ程に引込ませて、

「其で翠波さんは何うして居るのですせう」と逸む息を抑へて云つた。

「翠波は三子に夢中です、住江さんに失つた物を三子に得ようとして居るのでせう」

「其ちやもう住江さんの事はお忘れになつて居るのでせうかねえ」

「忘れては居ないでせうが、忘れやうとして居るだらうとは推測されます、三子に恍惚を抜かして居るのも、熱く聞いて見ると、女の顔が住江さんに似て居るからだ云ひます、夫ほど執着を持つて居ます」

「真正にお可愛想ですわねえ」

「可愛想なのは矢土老人です、まるで狂氣のやうになつて住江さんを探して居ます、あの人の氣質としては、一日も早く住江さんを探して、翠波に謝罪をしないでは、生きて居る天もしないでせう、最も見付次第打ち切ると云つて、例の魚兼光を玩つては居ますが、まさか、夫程亂暴な眞似はしないだらうと思ひます、そこへ奥さんが彼ですから、老人一人がやきもきと肝を煎つて居るのです」

雪子はまた元の談話に立戻つて、

「よもや其様事はないでせうけれど、住江さん、赤兒ちゃんを捨てるやうなことは無いでせうねわ」

「大丈夫そんな氣遣ひはありません、人一倍子煩悩です、人一倍い赤兒思ひです、假令自分の命を捨てゝも、赤兒ちゃんを捨てるやうな事はしないでせう」

「わたしも爾うは思ひますけれど……住江さんの赤兒ちゃんは、何とか云ふお名でしたわえ」

「珍しい名です、あまり類の無い名です、臍ちゃん」

「え、臍ちゃん」

「住江さんと翠波君の間に擧きた赤兒の名は臍です、今考へると、その頃から……」と云ひかけてまた氣が付いて「翠波もとぼけ者ですよ」

雪子は何時の間にか暗い冥想に落ちて居た、近頃——此一月頃から清野の歸りの晩くなる事があるのは、住江との間に何等かの聯絡があるのではあるまいか、と思ふ、それがまた強い疑念の標念となつた、住江の行方が歳を越えても分明せぬのは、清野の手によつて何處かへ隠匿されて居るのではないか、自分が夜更けて通行する道筋へ二人の間の赤兒を捨てゝわたしに、拾はせるやうな計畫をしたのではないか、何も知らぬわたしは、清野と住江との可憐兒を自分の子として育てゝ居るのではないか、そんなだと實際詰らない、とまで立入つたことを考へる。

すると、夫がさまゝな邪推に結ばれて、厭な深刻な心を持たせる。

「爾うかも知れない」

雪子は思はず口を出した、耐軒は聞き咎めて、

「何かお心當りがあるのですか」

と訊いた。

「まさかとは思ひますけれど、わたしの拾つた赤兒が、その臍ちゃんとかぢやないでせうかね」

「夫だけは保證します、先刻も申上げる通り、住江さんがどうして赤兒ちゃんを手放すのですか」

「ですけれど、戀の爲め盲目になる人がよくありますからね」

「爾う被仰れば……さうしたお疑ひがあるのですしたら、わたしも孰く調べて見ませう」

「誰か住江さんの赤兒さんを見知つた人はないでせうか」

「わたしが知つて居ます」

「でも、あなたでは信用されませんわ、十度の眼鏡がまだ足りないぢやございせんか」

「宜しい、それも一度考へませう」

耐軒は、何となく激しい壓迫を受けるやうに思はれてならぬので、そこへ暇を告げて逃げ出した。

後へ歸つたは、玉子を抱いた乳母であつた。

(三)

「乳母やは電車で耐軒さんに逢やしなかつたの」

雪子は乳母の顔を見ながら訊いた。

「耐軒さんか何だか知りませんけれど、白髭のお爺さんに逢ひましたよ、わたし一度もお目に掛つたことありませんのに、馴々しく側へ寄つて來て、それは何處のお嬢さんだの何だのつて色々なことを聞くんですもの、わたし困つちまひましたわ」

乳母は訴へるやうに云つて、玉子の兩腋へ手を入れると、二三度も膝の上へ立てやうとして、

「ねえお嬢さん、嫌なお祖父さんでしたわね」と云つた。

「お前、この子が良人の面に似て居ると思やしない」
暫くしてから雪子は訊いた。

「熟くお似なすつて在らつしやるぢやありませんか」

「わたし、爾うは思はないが、やつぱり眞當に似て居るのかね」

「お口許なんぞそれは熟く似て在らつしやいますわ、最もさう思ふのはわたしばかりぢやありません、お宅中の方が皆さう云つて居らつしやいます」

「どれお見せ、どんなに似て居るか、もう一度熟く見やう」

玉子を膝へ抱きとつて、つくづく雪子を見た、口許が酷く似て居ると乳母は云つたが雪子は耐軒から住江に似て居ると聞いた目を詠めた。

その目は梅の初花を見る如く匂かでもあり優しくもあつた、黒瞳勝の美しい間に、露の滴りさうな愛嬌が籠つた、住江の目がこんなであつたら、どんなにか深く清野の心を引き付けるであらうか、と思ふ心が、胸騒ぎを覺えるほど嫉妬に戦いた、今まで生の兒にも劣

らぬほど可愛らしく思つて居た赤兒の顔が、さながら鬼のやうに見え出した、同時に「これが住江の子だつたら何うしたものだらう」どの恐れも出た。

よもやとは思ふけれど、或はそこに何様仕掛があるかも知れない、萬々一これが住江と清野との間に擧きた兒であつたら、わたしも考へなければならぬ、と思ふ、然し流石に表には見せないで、

「やつぱり似てやしない、良人の口はもつと大きい」

「ですけれど……」

「斯うして見ると、良人よりは他にもつと酷く似た人がある、わたし今やつと氣付いた」

「へえ、誰方でせう」

「お前、翠波さん知らない」

「存じませんわ」

「それちや操の乳母やに見せて御覽……」

「お兼さんも旦那様に似て居ると云つて居ます」

「ぢや、お桑も」

「坊ちゃんのお乳母さんも爾う云つて居ます」

「異しいわね、そこへ耐軒さんは住江さんに似て居るからと云つて、わざ／＼氣を付けて来て下すつた、そんなにごつさり似た人があつちや、玉子だつて遣り切れない、お前翠波さんに見せて来ておくれなね」

雪子は嫉妬を隠して云つた。

「翠波さんて、何處の方でございます」

「眞にお前はお所を知らないね、築地三丁目だとは聞いてるけれど……ぢや、花代を伴れてお行で、花代はよく知つてゐる筈だ」

「わたし參ることは參りますけれど、何と云つて伺つたら可いでせう、どうかお嬢さまのお口許を見て下さいまして、さう云へば好いのでございますか」

「だけでも、わたしが指圖したと云つちや可けませんよ、只黙つてお目に掛けさへすれば好いのですよ」

雪子は斯うして此の赤兒が果して住江の舉んだ子であるか何うかを確かめやうとしたのであつた。

乳母は詰らなさうな顔をしたが、雪子が眞剣らしく云ふので、謝絶することも爲さず承知をした。

(三)

小間使の花代が付き添つて、乳母は翠波の家を訪ねた、夫でも住江の居る間は、庭も、式臺も、清淨に掃き清められて居たが、住江の姿が怪しい自動車の中へ吸ひ込まれて行つて後は、主の翠波も赤坂へばかり入り浸つて、五日に一度ぐらゐより歸つて來ない、留守の間は書生の藤澤が萬事を引き受けて始末の衝に當つて居るが、これも今年になつてからは、外出勝にして居るので、内も外も捨て置かれて居る、翠波が自慢の枝垂櫻も、誰一人詠める者さへ無く徒らに咲いて徒らに散つて了ふ、山吹の亂れ咲いた間に穿つた泉水も汀

に蛙の聲は間なくするが、これは一家の衰運の暗示する如く淋しく聞かれる、女中と小間使と飯焚とが、臺所に寄り集つて、午時過は誰に遠慮もなく笑ひ興する、その中へ今日は珍らしく翠波が歸つて、茶の間を酒の世界にして居た。

「熱いのを持つて来い、旨い物を取つて来い」

呂律も廻り兼ねる舌で大聲に喚いて居た、顔一面に酒毒が浮いて、何方かと云ふと瘦せた方であつたのが、氣味の悪いほども肥れて居た、白い中に蒼味を帶んだ頬へ、ぶつくと紅い吹出物がして居る、側へ行つたら腐れた心が息と共に溢れ出るであらうと思はれた

「お客様でございます、何う致しませう」

小間使は恐しさに執次いだ、藤澤は昨日出たきり不在であつた。

「誰だ」

翠波は尤めるやうに訊いた。

「清野さんのお召使ださうでございます」

「なに」と翠波は目を吊り上げた。

「清野の召使？ 清野の召使！」

「はい」

「其様者に會ふ必要は無い、返してしまへ」

「左様に申しましたけれども、是非お目に掛きたい物があるからと被仰いまして……」

「わしに見せたい物？ 清野がわしに見せたい物？ どうせ碌な物ぢやあるまい、追ひ返せ」

小間使は悄々と立ち上つて、次の間から廊下へ出やうとすると、翠波はよろ／＼と立ち上つて、

「諾し、逢つて遣る」

だらし無くなつて居る襟を調へて、つか／＼と玄關へ駆け出した、そこに玉子を抱いて居る乳母と小間使の花代とが居た。

「清野さんの召使といふのは君等か」

云ふ中に血走つた目がぎろりと光つた。

「はい」

乳母は進み出て答へた。

「何の用があつて來た、何の用が……」

「他ちやございませんけれども、一度この赤兒ちやんを御覽なすつて下さいまし」

「なに赤兒？ 赤兒が何うした？」

翠波は玄關の上り端へ腰掛けた。

「どうもしませんけれど、此の赤兒ちやん、誰方に似て居らッしやるんでございませう」

乳母は脊中に負つて居た玉子を翠波の前へ突き出した。

翠波は目動ぎもせず赤兒を見た、赤兒はばかりと目を開いて居た。

「お、赤兒……お、赤兒……この兒の目だ……この兒の目だ」

誰に云ふともなく斯う云ふと、穢い物でも拂ふやうに乳母の胸をどんと突いて、

「歸つてくれ、乃公はその目が嫌ひなんだ 一等その目が嫌ひなんだ」

斯う云ふと、改めて玉子の顔を睨みつけて、またつかつかと奥へ入つた。

(三)

雪子の面には段々と曇りが出て來た、今までは爾うでもなかったが、清野の舉動に深い注意を拂ふやうになつた、殊に清野が外出でもしやうとする時は、取り分け厭な顔を見せまた根掘り葉掘り、自分の心に承知の爲きるまで問ひ究めなければ承知しなかつた、その爲めに家庭の空氣が異な風に變つて行つた、笑ひ聲が絶えて蔭言が多くなつた。

すると清野の快活な元氣の好い顔にも、自然と霞が掛つて來た、三日前に横濱へ行つて夜遅く歸つてから、雪子が奥齒に物の挟まれたやうな舉動をして、碌々話も仕掛けないのが清野は不思議に思はれるほど壓迫を感じるのであつた、上野の櫻も昨日の雨ですつかり散つて、見る影も無い荒涼たる様になつたと聞いても、夫を弔ひに出る氣になれなくて、朝から書齋に籠つて居た、すると晝過ぎる頃雪子が玉子を抱いて入つて來て、古銅の瓶掛の前に坐つた、古い龍文堂の鐵瓶から白い湯氣が立つて、床の間の青磁の香爐から、嫋々と香の煙が立ち昇る、清野は一寸充血した目を向けて、

「玉子も大きくなつたねえ」と云つた。

「乳母が來てから目に見えて大きくなりました、あなたさぞお嬉しいでせう」

雪子は厭に云つて、清野の顔を睨いて見た、清野は斑竹の机に片肘持たせて、膝の上へ目を落しながら、

「わしよりはお前の方が嬉しからう、その子はお前の丹誠が血になつて太るのだ、お前が居なかつたら、その子はとても生きちや居なからう」

こんな事を云つたら、面の相格を崩して歎けばならぬ筈の雪子が、今日は莞爾ともしないで、

「あなた、此の兒の母親を御存じでございませうね」と訊いた。

清野は、胸へ白刃を當てられたやうに冷りとした、此の兒の母が或は住江ぢやなからうかとの疑念は最初から持つて居た、けれど住江が手づから最愛の子を捨てる筈はないと思つて、その推定を反古にすべく思ひ直したが、住江の赤兒はちやうど雪子がこの兒を拾つて歸る數日前に、永田の手へ奪られたとの事を聞いて、いよいよそれに相違ないやうな心

がしてならなかつた、然し、さうした想像を迂濶に口の外へ出しては、どんな間違ひが起るかも知れぬと思つて、肝心の住江にも云はなかつた、皆の口から「旦那様のお口許がそつくりこの嬢さんに似て居ます」と云はれるたび、清野は耳が聳きたいほどに苦しく思つた。

そこへ突然雪子から斯うした問を掛けられたのであるから、清野は「もし秘密が露顯したのではなからうか」と疑つた、この兒の母親が住江であるのを突き止めて、態とこんな事を聞くのではないかと恐しがつた、それで暫く無言で居ると、

「あなた、御存じなんでせう」

雪子の毒を含んだ聲が、強く清野の胸に迫つた、清野は一寸狼狽へたが、

「戲言云つちや可けない、神様ぢやあるまいし、そんな事を知つてさうな筈ないぢやないか」と笑ひながら云つたが、その聲には力が無かつた。

「いゝえ、御存じなんでせう、あなた秘して居らッしやるのでせう」

「馬鹿な、飛んでもない」

「夫ちや伺ひますが、此の兒の目許は、誰に似て居るのでございませう」

「今日は變なことでばかり訊くぢやないか、此の兒の目許が誰に似てるか、そんな事を知つてゐる理がない、詰らんことを云つてくれちや困ります」

「あなた眞成に御存じないのですか」

「無論知らない」清野は斯う云ふと、彈かれたやうに顔を擡げて、「お前、誰かに欺がれた」

「知らないと被仰れば夫までなんですけれど、わたし、あなたにお目覺えのない筈はないと思ひますわ」

「此奴は迷惑だ、はゝゝゝ」清野は笑ひに紛らして「強て似た人を求めたら、それはお前なんだらう」

清野は笑つて済まさうとしたが、雪子は其の手に乗らなかつた。

「あなた、近頃何方の方面へお出掛けになるのでございます」

「いよく異い、お前何うかしてやしないか、何方の方面と限つた事はない、用の都合

で何處へでも行くさ」斯う云つて雪子を見た、そしてその曇つた面から、或る何物かを見出さうとする様であつた。

「近頃の御用は大變遅くなりますことね、わたし何だか氣遣はれてなりませんわ」

「そこが用だよ、用は活きてゐるからね、遅いこともあれば早いこともある、其位の事はお前にも分つてさうなものぢやないか」

「いゝえ分りません、あなたの横濱は何方を向いてるか分らないんですからねえ」雪子に斯う當て付けに云はれたときは、清野の面がさつと變つた、實際横濱の用は早く終んで、歸途に立ち寄つた住江の用談が遅くなつたのであつた、尤も恁様事が雪子の耳へ聞こえて居やうとは思つて居ない、晝でも夜でも、住江の許を尋ねるときは爲さるだけの注意を拂つて、誰の目にも掛らないやうにする、横濱の歸りに寄つたときは、わざ／＼自動車を命つけて日がとつぷりと暮れてから、清風樓の玄關へ横付けにさせたのであるから、雪子は原より運轉手の他知つた者はない筈である。

夫が今日突然こんな言を云ひ出したのは、そこに確な實跡を掴んで居る爲めだらう、或

は住江を清風樓に隠匿して置いて、三日にあげず訪問することを、すつかり探索して居るのぢやないか、そこへ此の赤兒の目許が、住江に酷く似て居ることを誰かに聞いて、事實に近い邪推を逞くしたのぢやないか。

「さう思ふと、二三日以來、取り分けて様子が變だ」

清野は悲しくなつて來た、よもや知れるやうな事はあるまい、と思つてした事が、萬一にも露顯でもしては日頃の氣質から鑑みて、どんな騒ぎを引起すかもしれない。偶然に起つたことで、此方に何の關係もない事まで、嫉妬の目で見られては、それこそ家庭の平和が破れて終ふ、親戚に對しても、友人に對しても、面目ない思ひをしなきやならない。

「殊に住江は人妻だ」

斯う思ふと、惻然と戦慄が起つて來る、たとへ翠波との間がどんな状態に落ちて居ても表面は彼の妻である、この人妻を旅館の一室に隠匿して置いて濟むだらうか。

「此奴は可けない、妻に斯うした邪推が起つて居ては、よく／＼注意しなけりや可けない當分の中は住江へも御不沙汰しなきやならないぞ」

清野は遂に斯う覺悟した。

「あなた、此の兒の目許は誰に似て居ます、あなたお心當りがあるでせう」

雪子の聲が次第に險しくなつて來た、清野は暗い心になつて、

「そんな談話は止さうぢやないか、誰に似て居るか知らないが、今のところわしに爾うした記憶はない、お前も要らん詮索はしないで、育てる意なら育て、遣るさ、それとも否なら警察へ渡すとも、お前の心の濟むやうにするんだね」一寸腹立ちさうな様を見せた。

「わたし、育てるのが厭だとは云ひません、縁があつて斯うしてわたしの手へ落ちたのですから、能きるだけの世話はして遣りたいと思ひます、けれども、此の兒の目許が……此の兒の口許が……」と雪子は云ひかけて唾を呑んで「あなたのお口許に生寫しでございませうねえ」

「爾うかね、その談話はよく聞くが、わしは夫ほど似てると思つてないよ」

「さうして目許が……」

また同じ言を繰り返して云はうとしたが、悲しさど口惜しさが咽喉に詰つて、後の詞

を出すことが爲きなかつた。それで玉子を抱いたまゝ、目を抑へて次の室へ出て、倒れるやうに自分の室へ駆け込んだ。

(三七)

今日の日も暮れさうになつた、午後内儀さんが挿けて行つた牡丹の八重咲が活々と水をあげて、部屋一ぱいの香を吐いて居た。

然し、住江は牡丹の花を愛するだけの餘裕もなかつた、浴後の顔に目立つほどの害れを見せて、観世燃を二本作つた、そして目を閉つてその中の一本を引いて見た、後に残つたのは長い方であつた。

「駄目だ、幾度遣つても長い方は引けやしない」

彼女は泣き出したさうに云つた。

今日で恰十日の間、清野の訪問を受けないのであつた、遅くとも三日目に一度は来て

住江の淋しい心を慰めて呉れるのが例のやうになつて居た。それがこの前の月曜日に横濱からの歸途だと云つて訪ねて、夕飯を一所に食べて歸つてから、黽の道を切つたやうに來なくなつた、住江は頼みにして居る一本の柱が動き出したやうな心細さを感じた、もし此れ限り清野さんが來らツしやらなかつたら、何うしやうとの不安があつた、實家はあつても歸れない、良人はあつても近寄れない、加之に恐ろしい敵を持つた弱い身は、旅館の關を外へ出ることもさへ爲さない。

「清野さんは何うなすつたらう」

彼女はそれを種々に考へて見た、第一には「病氣ぢやないか」と思ひ、第二には「奥さんが驚く被仰るのぢやないか」と思ひ、第三には「もし他に増す花が生きたのぢやあるまいか」と思つた。

「御病氣なら仕方がない、奥さんが驚しくてお出けなさいことが爲きないのであつても日蔭に居る身は何うしやう法もない、斯うして沈とお便りのあるのを待つのであるが、萬々が一外に増す花が生きて、わたしを見返つて下さらなかつたら何としやう、親には見捨

てられ、良人には別れ、最愛の小供は他の手へ奪られて、その上天とも地とも頼んで居る清野さんを失つて、わたしの立つ瀬があるだらうか」

思へば思ふほど、考へれば考へるほど、一寸前が暗になるやうな心細さを感じて来る、今日はお入来があるか、明日はお便りがあるか、その事のみを考へて、十日の間を物思ひの中に過したが、十日経つてもまだ何の便りがないのに、もう堪忍が爲きなくなつて、「叱られるか知れないけれど、一度電話を掛けて見やう」と思つた。

今までも幾度か爾うは思つたが、そんな事をしてお氣に障つてはならない、夫ほどにはしないでも、その中にはお便りがあるだらうと思ひ返して、苛々する氣を抑へ付けて居たが、もう忍耐がしきれなくて、物思ひに包まれた身を起した。

とたんに、段階梯を上る登音が雜然聞えた、住江は襖に掛けた手を引いて、もしやと胸を騒がせたが、それは新しい泊り客らしく、女中に案内せられて、住江の部屋の前を十番室の方へ行つた。

「やつぱり違つて居た」

住江は絶望に近い聲を出して、そつと襖を引き開けると、今來た客の部屋で、女と男の笑ひ合ふ聲がした。住江は夫婦者のお客らしい、と氣付きながら階下へ降りて電話室を覗いて見ると、折好く誰も居なかつた。

清野の電話番号はすつと前から知つて居るので、すぐ受話機を取りはしたが、何となく氣がおくれて、番號を云ふ聲も慄へた。やがて、

「もし〜」と問が掛る、住江はどきまぎと慌てながら、

「あなた清野さんですか」と漸と訊いた。

「はい、清野です、あなたは？」

「わたしは……」と暫く口曇つて、「御主人はお宅で在らつしやいますか」

「主人は宅に居りますがあなたは誰方で在らつしやる」

斯う詰るやうに強く云つたは女の聲であつた。住江は「奥さんぢやないか知ら」と不圖思つた。

すると撞木を振り上げた盤若のやうな女の顔が目に見え、次の詞が出なくなる、慄へな

がら電話を切つて胸の鼓動を静めるやうに茫然と立つて居た。

「あなた、何を考へて在らッしやるのですよ」

内儀さんに斯う云はれて、住江はやつと我に返つた、電話室に躊躇んだまゝ、沈と考へて居たのであつた。

「あゝ、内儀さん」住江は悲鳴に近い聲を出して「わたし、飛んでもない事をしッちまつたのですよ」

「え、何うなさいました」

「今、清野さんへ電話を掛けたの」

「告いぢやありませんか、清野さんも随分ですもの、もう二週間程も來らッしやらないぢやありませんか」

「此前お入來になつてから、今日で恰ど十日になります」

「夫ですもの、電話位お掛けになるのは當前ぢやありませんか」

「ですけども、夫が可けなかつたのですよ、電話口へ奥さんがお出になつたのですよ」

「まあ嫌だ、何うして奥さんなんぞが出たのでせう」

「わたしの運が悪かつたのですわ、わたし御主人をお呼びやうと思つたんですけど、どうして大變な權幕ですもの——」

「あなた、お名を被仰つて」

「いゝえ、まだ其處までは行きませんでしたけれど……」

「夫なら可いぢやありませんか、何處から誰がお掛けしたか知れやしませんもの」内儀さんは入口に立つたまゝで云つて居たが「わたし一度掛けて見ませう」

「どうかお願ひ致します」

住江が悄然と外へ出ると、内儀さんが代つて入つた、そして暫く經つて出て來て、

「些ども掛りません、交換手が何うかしてるのでせう、もう少し後で掛けて見ますから、あなた御心配なさらないで在らッしやい、清野さん、何かお忙しいことがおありなんですか、それでなけりやお風邪でもお胃きなすつたのか、何か理由があるでせうから、わたし

「熱くお聞き申して見ませう。わたしが掛ける分にや、奥さんだつて何だつて、ちっども關ふことは無いんですからね」

「夫ちや宜しくお願ひ致します」

住江はちっども元氣が無かつた。

「あなた、わたしの部屋でちつと遊んで在らっしゃいよ」

「有難う、ですけれども……」

「御飯はお終みになつたのですか」

「いゝえ、まだ……」

「夫ちや後で入らっしゃい、お獨でお淋しいでせう」

「いゝえ、もう馴れて居ますから……」

住江は内儀さんに別れを告げて廊下傳ひに段階梯の下まで來ると、

「三味線を一挺貸して下さいな、どんなのでも可い」と云ふ聲が上から聞えた、續いて誰かの降りて來る登音がした。

住江は他人に面を合せるのが恐いやうに思はれて爲らなかつた、ごん／＼と降りて來る登音に脅かされて、逸早く段階子の裏の暗黒へ潜れたが、その時はもう遅かつた。住江は上から降りて來る客の顔を見なかつたが、客は住江の姿を鋭く見て、注意深く段階子の裏へ一瞥を與へたが、さり氣なく去つて、足早に電話室へ行つた、ちりん／＼と鳴る鈴の音が遙に住江の胸へ響いた。

住江は段階子の裏から出ると、逃げるやうに駆け上つて、三番室へ身を潜めた、そして電燈を背後にして、低い机へ突伏した、地の底へでも引き込まれさうな淋しさが、犇々と彼女へ迫つた。

然も、彼女は恐ろしい魔の手が、頭へ落ち掛つて居るのを知らなかつた、さつき段階子を上らうとしたとき、上から降りて來たは永田であつた。彼女は巧に避け得た意であつたが、鋭敏な永田の目が、この小羊を見免さう筈はなかつた。

十番室で三味線の音がした時、女中は住江の許へ夕飯を運んで來た、けれど住江は

苦勞で胸が一ぱいになつて、堪忍にも箸を取る氣になれなかつたので、其まゝ膳を下げて貰つた、後はまた一入淋しい、その中から大きな心配が落ちて、も來さうな氣持がして、幾度も背後の方を振り返つた。

「清野さん、何うなすつたらう、お内儀さんは電話を掛けて下すつたか知ら」
斯う思ふ下からまた別な事が考へ出される、それは赤兒の事であつた。
「わたしの赤兒は何うしたらう、全體何處へ遣られたらう、もし人鬼の手に掛つて、殺されてゐる居やしないだらうか」

住江の頭腦は、清野の事を思ふか、小供の事を考へるか、この二つの範圍を外へ出る事はなかつた、清野が來て居る間だけは、不思議に小供の事も忘れるけれど、清野を送り出した後へは、きつと赤兒の幻が見え始める。時に由ると泣き聲を聞くこともある。最初の間は乳房の張る苦みに泣かされたが、近頃はもう乳も止まつて、愛執のみが胸の底へ粘りついた、思ふまいと思つても思ひ出され、忘やうと思つても忘られない、小供が影をひそめると、後へ清野の面影が浮いて出る、小供と、清野と此の二つがぐる／＼廻つて、住

江の頭腦をかき亂した。

「赤兒は何處へ行つたらう、さうしてわたしの身は何うなるだらう」

住江は思はず吐息をついた、この間に男の聲が廊下に聞えて、それがいつも住江の部屋の前で止まつて、すぐまた段階梯へ繼いで行つた、そして遂に電話室へ入るらしく住江には考へられた。

十番室の三味線は、引き續いてしめやかに聞こえて居た、重太夫節で俊寛を語る好い咽喉が時々聞える、住江は三味線に興味はないけれども母のお信が重太夫節を巧く語るので小供のときから耳に熟して居た、殊に「鬼界がしまに鬼は無く、鬼は都にありけるぞや」のところに、一段と懐しい記憶があつたので、不圖母の事を思ひ出した。

「お母さんは何うして在らつしやるだらう、さぞわたしの事を心配して居て下さるだらうお父さんは恐しいけれど、お母さんだけでは逢ひたい、いつそお母さんへ手紙を出して見やうか知ら、もし此のまゝ清野さんが來らつしやらなかつたら、わたしはお母さんのお袖に縫るより他仕方が無い」

すると、清野と小供との間に、小さく結つた丸髻姿の母の顔が浮いて出た。

「お母さんに逢ひたい、お母さんに逢ひたい」

久し振と云つては不幸のやうであるけれど「真に久しくお母さんのお目に掛らない」と住江は思つた、心に幾度も謝罪をした。

する中に三味線はびたりと止んで、女の爽かな笑ひ聲が聞えた。

「世には彼した世界もある、食ふ物も咽喉へ通らぬわたしのやうな世界もある」と住江はまた新しい哀愁を感じながら、内儀さんに借りた枕時計を見ると、何時の間に經つたのかもう十一時を過ぎて居た。

「お内儀さんの電話も當になりやしない、明日の朝になつたら、もう一度掛けて見やう」彼女が斯う思案するとき、女中は床褥を取りに來た。

「旦那は何うなすつたのでございませうねえ、一度電話をお掛けになつては如何でございませう」

「さつき内儀さんにお頼みして置いたんですが、何もお話しなかつたのですか」

「おや、左様でございますか、一度聞いて参りませう、内儀さん忘れて居るのぢやないでせうか」

云ふ中に床褥を取つて、淋しう枕を一つ置いて、慌てたやうに出やうとして、

「あゝ、お手紙が参つて居りました、わたし何うしてこんなに忘れっぽいのでございませう……………」

笑ひながら懷から取り出して住江の前へ置いたのは、一目見て分る懐しい清野の手蹟であつた。

「久しく顔を見せないから、あなたはさぞ淋しがつて居るでせう、わしが病氣にでもなつたかど氣を揉んで居るでせう、然し、わしは病氣でも何んでもない、あなたの許もお訪ねしたいが、どうしても家を出ることが爲きないので、外にも用のある先があるが、そこへも成るべく遠慮して行かないで居るのです、それは妻があなたの事を感付いたらしいからです、わたしがあなたを清風樓にかくまつて居ることが、もし妻

にでも知れやうものなら、それこそ身の上の大事です、あなたのお身も大切ですが、わたしの身も大切です、双方の上を思ふと、暫く斯うして遠慮する他ないのです。

わたしは幾日お目に掛らなくても心は少しも變りません、わたしはもとの清野です、どうかそのつもりで居て下さい、昨日芝まで用事があつて、内の自動車で出かけたから歸途にお寄りしやうかと思ひましたが、運轉手にも油斷がならないから止めにしました、もう暫くの堪忍です、いくら嫉妬深い家内でもさう／＼嫉妬を續けては居ないでせうから、少しでも隙があつたら出掛けます、もし小使錢が欲しかつたら内儀さんに頼んでお借りなさい、内儀さんへはわたしから熱く頼んで遣ります、それからあなたの宿賃その他は、わたしが行つたとき拂ひますから、これも心配しないで居らっしゃい。

何事も氣にしないで、長閑な日をお送りなさい、その中にはあなたを照す太陽がめぐつて來ます、あなたの赤兒さんもいつか現はれて來るでせう、それについてはわたしに少し心當りもありますけれど、手紙には書かれませんか、今度お尋ねしたとき

委しくお話し申します、云ふまではないが身體を丈夫にしなきやなりません、時候が定まらないから氣をお付けなさい、まだ書きたいことが澤山あるが、妻の目を盗んで書くのだから長く書いて居ることができません、これでやめます、後はどうか推量して下さい」

これが清野から來た手紙の内容であつた、住江は讀み終ると共に嬉し涙が咽喉へ迫つた、殊に赤兒の事について、心當りがあるからどの一節に讀み至つたとき、身體が慄へるやうな歡喜を感じた「清野さんは其程までに、わたしや小供の事を思つて居て下さるか」と思ふ心が、清野に對する憧憬と信用とを深くした。

「病氣ではないか」「心變りではないか」と心配して居たことが、この手紙で全部除れたので、今夜は心安く眠ることが爲さるだらうと、歡びながら枕に着いた、清野の手紙を懷中深く藏めたまゝ、

「わたしはあなたの事を御様にまで思つて居ます、奥さんのお手前もありますから、定めて御迷惑ではありませうけれど、どうか末長く保護を加へて下さい、わたしあなたに見捨

一三二
てられては何處へ行くさきもありません、また何處に縋る袖も持ちません、お願ひ致します〜」

夜着の中に手を合せて、清野の幻を拜んだ、その心がいつとなく眠りに落ちてうと〜と寝たかと思ふと、外から内儀さんが聲掛けて、

「あなた、清野さんからお手紙が来ましたよ、お家の御都合で當分はお出ましになることが爲きませんで……」

「お内儀さんですか、まあお入りなさい、お手紙はわたしへも参りました」

「御安心なさいまし、清野さん眞成に御心切で在らっしゃいます、これであなたも御心安くお寝みなさる事が爲きませう」

「えゝ、お蔭さまで……」

「ですからお電話は掛けずに置きました、左様ならお寝みなさい」

「どうも態々恐れ入りました」

内儀さんは態々これだけの事を云ひに來たらしかった、住江は起きて、電燈に被をかけ

て再び枕につくとすぐ、またうと〜と夢に落ちた。すると暫くして、

「おい〜」と聲高に呼ぶ者があつた、住江は襲はれたやうに目を開いて、枕頭をじつと見た。

と、其處に朦朧と黒い大きな物の立つて居るのを認めた。まだ夢から覺め切つて居ない

住江は、もし清野が來たのぢやないか、と思つて一たん出した顔をまた夜着の中へ藏さう

とした、とたんに、

「おい」とまた呼んで「乃公だよ、見忘れはせんだらう」と覆せるやうに強く云つた。

住江は初めて我に返つて、彈かれたやうに起き上ると、改めて聲の主を見た。

それは住江の爲めに悪魔よりも恐ろしく思つて居る永田であつた、蛇のやうな目をびか

くと輝かして立つたまゝ住江を見下して居た、茶の中折帽を面深に被つた淺黒く肥え

顔が、地獄から迎ひに來た赤鬼のやうに恐しかつた。

住江は「きやつ」と叫んで逃げ出さうとした。けれど何の效も無かつた。悪魔の長く逞しい手は、早く住江の頸鈴にかゝつて居た。住江がもぎ放して駆け出さうと藻掻くの左

の手で抱きすくめて、手早く用意の猿轡を箝めて終つた。

住江はもう何うすることも爲さなかつた、聲を出さうにも口の自由を失はれて居た、駈出さうにも足は動かさなかつた、永田は頸を抱へたまふ、

「どんなに行方を探して居たかしの、けれよく縁があつたと見えて、今夜圖らずお前を見た、いろ／＼話したいこともあり、また開きたいこともある、氣の毒だが一所に来てくれ」

住江は幾度も首を振つた。

「お前はわしの言ふことを肯かなきやならない、お前はわしに赤兒を預けて居るぢやないか、つい其處へお前を迎ふべく自動車も来て居る、さあ出なさい」

住江は起つまいとして身煩悶したが、それすら益に立たなかつた。永田は抱へるやうに引き立て、外套の袖の下へ擁き縮めながら、徐に段階梯を降りた、時は一時を過ぎて部屋々々に駈の聲が聞えて居た、折からの寝入端は、三番室に斯うした活劇の演ぜられたのを氣附く者が一人もなかつた。

住江は歩むまじとしながら歩いた、永田は熟く勝手を知つて居た廊下を横切つて玄關へ出やうとした。

「おや、今頃何處かへ行らつしやるのでございますか」

一人の女中は眠たさうな顔をして出て來た、永田は住江を外套の袖の下へ隠して、

「家内が急に腹痛を起したから、一寸醫者の所まで行かうと思ふ、後を頼む、荷物もそつくり置いてある」と真らしく云つた。

「おや、夫は可けませんね、何ならお醫者をお呼び申しませうか」

「なに、夜更に雜作を掛けちや濟まない、醫者は近所だ、一寸診察を受けて來やう」

女中は前へ駈けて云つて、表戸の樞を外した。

住江は、女中に一目見られやうとした、女中が猿轡を箝められて居るこの顔を見てさへくれたら、何とかなるであらうと思つて、成るべく外套の袖の下から、顔を出さうと努めたが、永田は用心深く暗い方へ向けて、遂に難なく潜戸を外へ出た。

外は墨を流したやうに暗かつた、今にも降り出しさうな雨雲が、天一面を封じて、生温

かい風が淋しい町を吹いて居た。

「お早く、お歸りなさいまし」

「あゝ、頼むよ」

女中は再び戸をさした。住江の身體は暗の間を運ばれて、一丁はごも左へ行くど、その四辻に一臺の自動車が待つて居た、永田は無言のまゝ立寄る、運轉手も無言のまゝ上り口の扉を開ると、住江と永田とを大きい口へ吸ひ込んで、爆音高く南へくど駈け去った。白働車の姿が見えぬやうになつたとき、ぼつりくど大粒の雨が降り出した。

(三八)

雨雲は三日も續いて、晩春の天を鬱陶しく暗くした、清風樓では内儀さんが眞面目になつて、住江の所在を探したが知れなかつた。

「一度清野さんへ電話を掛けて見やうか知ら」

斯う思つて長火鉢の前に坐つて居るとき「あら、清野さんの旦那が來らつしやいましたよ」と一人の女中が彈かれたやうに立ち上つて、玄關の方へ駈けて行つた、内儀さんは取り敢ず火鉢の前に坐を設けた。

清野は茶の中折帽を面深に被、獺の皮には少し温か過ぎる時候外れの外套の襟で頬を埋めて、無言のまゝ電燈口へ姿を現した、内儀さんは見ると、

「おや、來らつしやい、克く來らつしやい」と嫣然に挨拶した。

清野は女中が外套を脱がせやうとするのを止めて、火鉢の前に坐るなり帽子を取つた、頬にも額にも膏汗が浸潤んで居た、内儀さんは手早く煎花を侑めて後、

「あなたへは辯解のない事が生きましたねえ」と困つたやうな表情をした。

「住江が何處かへ行つたつてね」と清野は元氣のない顔で云つた。

「あなた、何うして御存じでございます」

「今、女中に聞いたのさ」

「ぢや、まだ手前方に在らつしやるお意志で……」

「無論さうさ」

「まあ何うすれば好いのでございませう」と内儀さんは氣の毒さうに清野を見て、

「御新造さん、どんなにかあなたを待ち懸れて在らつしやつたでせう」

清野は卷簾に失望を隠しながら聞いて居た。

「口で申し上げると此だけでございませうけれど、眞個にお可憫さうでございましたよ、二三日はお食事も爲さらないで、旦那の事ばかりお尋ねになつて居た事もございました、それが彼の晩、ひよつくりお姿が見えなくなつたのでございますから、皆がどんなに不思議がつたか知れやしません、あの方に限つて、其様な事があらうとは、思ひも付かない事ですものねね」

「わしもまるで夢の如だ、最も四五日用事があつて、どうしても尋ねることが爲きなかつたから、多少心配して居たらうとは思ふが、まさか隣室に泊つた客と駈落しやうとは思はなかつた、よく新聞の雜報などに、七人の子は擧すとも女に肌を許すなどわ書いてあるが女の心は實際當にならないものね、わしも住江だけは見損つた、まさか——」と云ひかけ

て氣を替へて「わしから送つた手紙は見たか知ら」

「御覽になりました、ちやうどその晩でございましたよ」

背後に坐つた女は云つた。

「すると、其の男と約束でもしてあつたのかね」

「其邊はよく分りませんが、わたくし其の見たところでは、そんな様子も無いやうでございました、最も夕方少し前に、一人で電話室へ入つて、何か考へ事をして居らつしやるやうでしたから、何をして在つしやるのでございませうと、お尋ねしますと、今お宅へ電話を掛けたら、奥様らしい方がお出になつて眞個に閉口してしまつたつて、そんな事をお話しになりました、最もそのお客と云ふのも、電燈の點る少し前にお越になりましたがね」

「ちや、彼の時の電話は、やつぱり住江だつたかなあ」

「あなた、お氣付きでございましたの」

「いや、妻から聞いて異しく思つて居たんだよ、妻は普通の婦人から掛つたのではないと云つて居たが、やつぱり住江が掛けたのかね」

「それもよく／＼お考へなすつた上の事ですよ」

「其の時まで、それほど思つて居た者が、どうして急に心變りをしたのかね、わしは事實と思へない、内儀さん、欺瞞いで居るのぢやないか」

清野は考へながら云つた。

「さうしてその客はもし永田と云ふんぢやなかつたかね」

清野は暫くしてから訊いた。

「いゝえ、山下さんと被仰る方でございます」

「山下？誰たらう」清野は一寸考へて「無論馴染の客だらうね」

「お馴染といふほどではありませんけれど、三四度も來らしつたことがございませうか、それがあなた、何時も違つたお女中を伴れて來らッしやるのでございますよ」

「よく／＼の色魔と見えるね」

「斯う云つちや何ですけれど、あまり好い御身分ぢやないやうにお見受けしました、最も切放れが悪い方ぢやありませんが、身體の品格に争はれないところがありますよ、まあ好

くつて土方の親分かなんか——」

「甚い奴に引掛つたもんだねえ」

「夫もあなたの所爲ですわ、十日も一週間も、端書一本お上げなさらないんですもの。御新造さんにして見たら、どんなにかお心細く思召したか知れやしません」

「女つてものは、そんなに忍耐のないものかねえ 高が十日か二十日——それもお内儀さんに萬事がお頼みしてあるんだから、心配するには及ぶまいと思つてたのにねえ」

「一概に云ふことは爲きませんけれどもね、人々の氣質にも由りますけれどもね、杖柱と頼んでる人から、便りの來ないほど心細いものはありませんよ」

「だつて内儀さん、いくら心細いからと云つて、泊り合せた客と逃げるには當らないぢやないか」

「ですから氣質に由ると云ふのですわ、御新造さん、あれ程あなたの事を思つて居て、ひよつくり、あんな事を爲すつたのは、全く魔がさしたに違ひありませんね、どうせ今頃は後悔して在らッしやるでせう、相手は色魔のやうですもの……」

「全體何處の男なのかい」

「宿帳には中澁谷とありますけれども、後に残されたお女中の話で聞きますと、麴町邊の人らしいやうにも思はれます、わたしも調べるだけ調べて置かないぢや、あなたにお目に掛つたとき、辯解がないと思ひましてね、中澁谷へ使を出して見ましたけれど、そんな人は居ないさうです、それでもしやと思つて、電話帳を調べましたけれど、夫かと思ふやうな人は一人も無いのでございますわ」

「よつばと變な奴と見えるね、すると、その伴侶の女は何う云ふ關係を持て居たのかね」
 「上方歌か何かの師匠だらうとわたしは見ました、山下さんとは二三度會つたばかりで、詳しい身許は知らないと云ふんですの、最も宿代やなんぞは何うか斯うか拂ひましたけれどもね、自分の伴れられて居る旦那が、他の女と墮落するのもしらないで、寢込んで居るほどの女ですもの、何處か足りない點のあるのは知れてますわ」

「然し、可憫さうな者だねえ、玩弄された上に宿代まで拂はせられりや世話はないねえ」
 「眞個ですわ、おほゝゝゝ」

内儀さんは笑つたが、清野は笑ひどころの騒ぎでなかつた、雪子に對する遠慮から十日近く訪問を怠つて居た間に、檻の中の鶯は他の梅林を見掛けて通げた、住江が普通の女でなく、普通の境界でなく、また自分との間が普通の關係で無いだけに、失望よりも不安を感じ、現在よりも未來を恐れた、殊にその晩住江が男と共に出て行くところを見た女中から、わたし異しくは思つたんですけれどもね、御新造さんが隠れるやう／＼になさるものですから、つい見損つて了つたんですわ、わたし何うも新しい馴染でないやうに思ひますわ」と聞いたとき、清野は最も厭な心になつた。

「全體何處でそんな男を知つて居たらう」

第一はそこに疑念があつた、すると永田の手から辛うじて逃れ出たといつた、彼女の言葉にも疑ひの雲が掛つて来る。

清野は内儀さんが云ふ山下といふ客と、住江が監禁の憂目を見せられて居た永田といふ男と、同じ人間である如く思はれてならなかつた、永田が姓名を變へて、彼方此方で關係する女を伴れて來るに違ひないと斷定した。

「それがひよつくり、住江に逢つたのだ」

この想像が當つたとすると、その男に伴れられて姿を晦ました住江の行動に不審が出て來る。

「永田の脅迫には、死の覺悟をもつて當つて居たやうに云つた住江の詞も、信ぜられない事になる、もしそれが事實であつたら、夜に紛れて墮落などはしない筈である」

斯う思ふと、彼女に對して探つて居た同情が、力弱いものになる、住江の心は石よりも鐵よりも堅い物とのみ信じて居た心の基礎が動き始める、

「そんな女だつたら、最初から相手になるのぢやなかつた、虐待をされて居たといふのも虚言、白刃の下で堅く操を守つて居たといふのも虚言、小間使の心切に助けられて、堀越しに逸れ出たといふのも虚言、何か口論でもした揚句飛び出して、わしの懷へ抱かれや

うとしたのだらう、夫で無かつたら、甲夜までわしの事を思つて居て、忽ち心變りをする筈は無いだらう」

清野には斯うした邪推がづきづきに起つて來た、さうした腐れた女だつたら、家庭の平和を缺いてまで、眞心を運ぶのではなかつた、この家で保護を加へるのでもなかつた、門前であつたとき、突き放してしまへば好かつた、矢土老人へ引き渡すのであつた。

「あゝ、飛んでもない事をした」

清野は百圓紙幣を二三枚遺失したやうな氣持がした。

「然し、切角お入來になつたのですから、三番で一杯召し喫つては如何でございます、御新造さんは在らっしゃらなくつても、まだ餘香が残つて居ますわ」

内儀さんは不思議な表情をしながら云つて、溢れさうな笑顔を清野に向けた。

「そんな事はして居られない、遅くなると大變だ」

「でも、御新造さんが在らしつたら、そんなに早くお歸りなさる事は爲きないでせう」女中は笑ひながら口を出した。

「全く爾うだわ、旦那、一盃だけお上りなさいよ」

内儀さんや女中が口々に引き止めるのを振り放つて、淋しい心を抱きながら清野は出た。いつもは舐車か自動車で往復するのであるが、人目を忍ぶ身はそんな事にも氣を兼ねて、成るべく駆け放れた停留場から電車を利用した。

それほど八方へ氣を配つて尋ねて来た効も無く、目標にして居た住江は素性の知れぬ男に伴れられて、その身の翹の下から去つた。

「考へると詰らない」

清野は氣拔でもしたやうになつて、本石町の家へ歸ると、

「お父さま、お歸り遊ばせ」

玉子の乳母が斯う云つて出迎へた、日ごと夜ごとに肥立つて行く赤兒は、清野の顔をよく見知つて、きやツ／＼と歡び笑つた、

清野は不圖赤兒の顔を見た、と、その顔が住江にそっくり似て居た、殊に目許の愛らしさと、口元の締りの好さどが、さながら瓜を割つた如くであつた、清野は腹の底が顫覆

るやうであつた、清風樓に居なくなつた住江が、何時の間にかこゝへ來て、自分を出迎へて呉れたのかと思はれた。

「やつぱり爾うなのか知ら」

清野はまた別の考へに胸底を搗き廻されながら室へ入つた。

(四〇)

あはれ住江は再び寒竹の庭を控へた小座敷へ押し籠められた。

やつと地獄から遁れ出て、思ふ人の懷へ抱へられた歡びも束の間であつた、偶然か、謀つて來たのか、そこはよく分らぬけれど、鬼の手は再び住江を抱擁して、この無氣味な淋しい座敷へ入れて了つた、住江は泣いても追ひ付かなかつた、諦めるにも諦められなかつた、

「今度は何うしたつて逃がしやしないぞ」

永田は片時も側を離れずに斯う云つた、前には心切なお梅が居て時々慰めても呉れたけれど、今度はそのお梅の姿さへ無い、意地の悪いお松お鶴二人の外名を聞いても恐ろしさうなお虎といふ下婢が来て居た、最初から居る二人の仲働きだけでさへ、住江はどんなにか甚い虐待を受けて居たのに、その二人を一個にしたよりもまだ性質の悪いお虎が居て、永田の心のまゝに働いた、永田の目が見えなくなると、お虎の目が代つて出て嚴重に監視をした、大きく云ふと手水に行く間も、お虎は後から従いて來た。

「おれは望みを遂げる爲めに腕力は用ひない、一年でも二年でも、お前がその堅い意地を折つて、わしの前へ一身を捧げるまで斯うして居る」

永田は相變らず期う云つて居た、住江に取つてはそれが切ての歡びであつた。

もし永田が腕力に訴へても、望みを遂げやうとするのであつたら、住江はいかに藻掻ても、操を守ることは爲きなかつたであらう、住江は手弱い女、それに對する永田はよく肥ゐて、臂力も他人に優れて居た、彼が魔の手を大きく擴げて、住江を抱き縮めて了つたら荒鷺の羽の下に取り込められた小雀のやうに、總ての運命を任すより他なかつた、その場

合、女としての權威を傾けない方法はいよゝとなつた刹那、舌を嚙んで死ぬのであるが半生から氣の弱い住江にさうした思ひ切つた仕事が爲きるか何うかは疑問であつた。

それに永田が「戀には腕力は出したくない」と云つて、何處までもその主義を押し通して居るのが、住江には不幸中の幸福となつた、彼女はさうした危ない岩の下でやつと命を持續ける事が爲きた。

住江は食ふ物も咽喉を通らなかつた、然し「御飯だけ戴かなければ、赤兒を見る目の力までが滅びて終ふ」と思ふ心に促され、厭厭三度の膳には珍しい下物や甘味さうな料理がついた、取り止めやうとする考へから、三度の膳には珍らしい下物や甘味さうな料理がついた、けれど住江は、只露命さへ繫げば好い、と思ふ心で、僅に茶漬を流し込むばかりであつた、清風樓で清野の心切に取り返した顔の光澤が、こゝへ來てから段々と落ちて行つた、ふつくりと昔の色を持つて來た頬の肉も、げつそりと瘦が見えた、再びこの座敷へ押し籠められてから、まだ一月とは經て居ないのに、三年も病んで居た人のやうな憔悴が、彼女を陰氣な姿にした、

さうした間も「清野さんは何うなすつたらう、わたしが斯うした事情で清風樓を去つたのを御存じ遊ばさないで世話のしがひもない者だ」とさげすんで居らつしやりはしないだらうか、萬事に氣の注ぐ内儀さんが、大略を推量して、わたしの傷にならぬやうな報告をして居て下さるだらうか、夫ならまだ生きる瀬はあるが、夜に紛れて永田さんと一所に彼の家を駆落したやうに思はれては、此のまゝ死ぬるにも死なれない、一生の中にはもう一度清野さんに會つて、悲しい恐ろしい事情をお話し申さなければならぬ」

住江は此の事と小供の事のみを思ひ續けて暗い日を送つた、

彼女の悲しみは千尋の海の底よりも深かつたが、それを詮じつめて見ると、

「永田と一所に逃げたやうに思はれて居たら何うしやう」と云ふ所に結局した。

住江は此の心配が胸に鎖した、他の人は兎も角も、清野にさう思はれるのが何よりも辛く悲しかつた、少しの餘裕でもあつたら、その夜の恐ろしかつた光景だけを書いて、郵便に出したいと思つたが只それだけの隙もなかつた、彼女は思ひに瘦せて行くばかりであつた。

(四二)

それは六月も盡きやうとする初夏のある夜の事であつた、庭の寒竹の戦ぎに夢を破らされて、住江は不圖目を覺ました、

次の間にお虎とお松とが、眠さうな聲で話をして居る「もう何時だらうか」と思つて、枕頭の置時計に目を遣つたとき、つい近くで赤兒の泣く音が突然聞えた。

住江は彈かれたやうに起きて、床褥の上にびたりと坐つた。

屋敷が廣く取つてあるので、外界からの物音は何も聞えない、松の梢を亘る夜の風が一頻り過ぎ去ると、天地は元の静寂に立返る、その時、また引き入るやうに泣く赤子の聲が間近く聞えた、住江は、それが自分の生んだ赤ん坊の聲に聞きなされて、胸が騒いだ、永田の手に渡してから、遂に消息も聞かず、又聲も聞いた事がないのに、その夜突然同じ家へ歸つてくる筈はないと思ひながら、何となく心がそれへ引きつけられた。

「妾の赤ちやんだ!、赤ちやんが歸つてきたんだ!」

斯う思ふと矢も楯も堪らなく會ひたい、顔が見たい、長の間何處へか隠して置いたのをどうか云ふ都合で取り戻してもしたのか、それとも他に仔細があつてこの屋敷へ連れてきたのか、假令どんな事情があらうとそれを詮議するまでではなく、赤兒が見たい、住江は先づ、その聲の起る方角を確めやうとした。

聲は二室ほどを隔てた廣間から聞えるらしかつた、食にでも餓えてゐるらしく宛ら焼き附くやうに泣き入るのが、恐ろしい勢ひを以て、住江の胸底へ喰ひ入つた、住江は堪りかねて、匍ふやうに次の間の取り合せまで行くと、閉つてゐた襖を開けて、

「赤ちやんが泣いてゐるぢやありませんか」と聞いた、二人の下女は顔を見合せたまゝ黙つてゐた。

「あの赤ちやんはお宅の赤ちやんでゐらつしやいますか、それとも他から聞えるのでございますか」

住江が再びかう聞いた時、廊下に、男子の影が太く映つて、

「誰だ、誰だ！、今頃話をしてゐるのは誰だ」

尖り聲に答める如く聞くと永田は、酒に火熱る大きな顔を見せた。

お虎は、媚を帯んだ眼に見上げて、

「お客様、甚く赤ちやんのお聲がお心に掛るやうでございます」と云つた。

住江は永田の顔を見ると、恐ろしさに堪へぬ如く襖の蔭に小さくなつて、オド／＼と永田を見詰めてゐた。

「さうか、赤ん坊に會ひたいのか、ワハ、」と高笑ひして、風通しの良い縁端へ安坐を搔くと、無造作に煙草盆を引き寄せて、スパスパと巻煙草を飲み始めた。

「あんなに仰有つてゐらつしやるのですから、一目だけ拜ませてお上げなすつては如何でございます」とお虎は再び云つた。

すると、永田はムラ／＼と立上る煙の間から住江を見て、

「さうだな、會はせる心算で連れてきてゐるんだから、會はせたつて好いのだが、併し、その前に一寸約束のして置きたい事がある、氣の毒だがお前達は一寸其處を遠慮してくれないか」

「ハイ、宜しうございますとも、それではお臺所へ下つてをります、御用がございましたらお手を鳴らし下さいまし」

二人の下女は、云ひ捨てゝ出て行つた、住江は、襖の蔭に小さうなつてゐるばかり、永田は煙草を吹かすのみ、その間に暫くの間沈黙が續く、赤兒の泣聲はやはり淋しく聞えてゐた。

「オイ」

永田は、稍あつて斯う呼ぶと居住居を正して住江の方を向くと、

「お前、あの赤ン坊を誰だと思つてゐるかね」と聞いた。

住江は無言、

「オイ、お前は、あの赤子の聲に聞き覚えがあるかね」

同じ事を繰返すと一尺程膝を進めた。

「オイ、あれはお前の生んだ赤ン坊だぜ、お前の血を分けた赤兒だぞ、會ひたくないか」
永田は斯う云つてニヤリと笑つた。

「え、私の……」

住江は後の言葉が續かなかつた。それが果して自分の生んだ赤兒の聲に違ひないのであつたら、駈けつけて抱き度かつた、抱き上げて頬擦りがしたかつた、息の詰る程に抱き締めて思ふ様に泣きたかつた。

「さうだ、お前の子だ！、見たいか、抱きたいか」

「後生でございます、どうか抱かせて下さいまし、私、赤ン坊を抱く事が爲きましたならそのまゝ死んだつても恨には思ひません」

「冗談云つちや不可ないよ、お前を殺すつもりでは赤ン坊を呼び寄せやしない、お前を生かさうと思ふからだ、お前は、あの子と共に生きなきやならない、さうだ、生きる氣か」

「生きます、生きます、赤ン坊と一所だつたらどんなにしても生きます」

「よし、それさへ聞けば、俺の方にも考へがある、併し、お前と赤ン坊とが生きるばかりでは詰らない、俺を何うしてくれるのだ」

「ね！、貴郎を……」

「俺も生きたい、お前と赤ん坊どが生きる側で、俺も同じやうに生きたい、生かして呉れるか」

「生かすと云つたつて貴郎！」

「生かすも殺すも、お前の心一つにあるのは、恰度今泣いてゐるあの赤ん坊、あれを俺の心一つで殺すも生かすも自由自在になると同じだ、お前の言葉一つで俺が生き俺の考へ一つで赤ん坊が生きる、お前の、赤ん坊を生かす心があるなら、併せて俺を生かして呉れ」

「でも、貴郎！」

「手つ取早く云ふ、俺を生かすのは、俺の云ふ事を聞いてくれるんちや、何時かも云つた通り、手籠にして望みを遂げやうと思へば何の造作もなく望みが遂げられる、併し、それでは面白くないから、斯うして心長くお前の心の折れるのを待つてゐたんだ、お前が赤ん坊を思ふ心ど、俺がお前を思ふ心との間には、同じ程の熱力が有る筈だ、お前が赤ん坊に生死を懸けてゐる如く、俺はお前に命を懸けてゐる、赤ん坊に會ひたくば俺の云ふ事を聞いてくれ、赤ん坊と共に生きたくば先づ俺から生かして呉れ」

永田は、鋭い言葉を以て迫つた、この間も赤ん坊の泣き聲は、力なく聞えて来る。住江は、二つの大石に胸を押さゝれて生血を絞られるやうな悲しみを感ぜないでゐられなかつた、永田の心に従へば、懸焦れてゐた、いとし兒を掻き抱く事ができる、併し、今日まで千辛萬苦の間に持ち續けてきた操を永田の毒手へ捧げるのは、生きながら焦熱地獄へ落ちるも同じである、女として、堪へ得べき事ではない、操を守らうとすれば兒の愛に反き、赤ん坊の愛を完うしやうとすれば、操を捨て、了はなければならぬ、彼女は、又絶體絶命の岐れ路に立つた。

「オイ、どうだ、返事をしないのか、お前が何處までも返事をしないと云へば、……俺の云ふ事を諸かないと云へば、あの泣聲を聞けないやうにするばかりだ、あの泣聲を持つてゐる小さい喉へ拳を當て、壓し潰せばそれで終ひだ、俺はいつでも好い、お前の心次第で何れの方法でも執つて見せる、返事をしろ、返事をしろ」

どれ程に催促されても、住江は満足な返事をする事ができなかつた、暫くすると永田は立ち上つて、

「これ程云つても分らなけりや詮方がない、一思ひに捻り潰さうか」

住江は、我を忘れてその裾に縋りついた。

「貴郎、まア待つて下さいまし」

「ぢや、俺の云ふ事を諾うのか」

永田は斯う云つてギロリと下眼に住江を見た。

住江は又無言に落ちる、庭の寒竹に露が三つて、それに宿つた星一つ玉の碎ける如く碎ける。

赤ン坊の泣く音が又強く聞えてきた。

「今夜は手詰の談判をするつもりで、赤ン坊を連れて来たんだ、俺も荒療治はしたくないお前が云ふ事を諾いてくれる心であつたら生のまゝで渡したい、併し、嫌と云へばそれ迄だ」

この時、住江の心に假令死んでも永田の心に従ふ事は爲さぬ、同じ死ぬなら赤坊を抱いて死にたい、どの心が動いた。

とても生る見込が無いのであつたら、幹と赤兒を抱きしめたまま死なうと覺悟したの、やる瀬なさはどんなであつたらう、彼女は悲鳴に近い聲を張つて、

「それぢや、赤ン坊に會はせて下さい」

と云つた、永田はニヤリ笑つて、

「よし會はせてやらう、然しその言葉が俺に對して總ての承諾を意味してゐなければならんぞ、良いか、片手に赤ン坊を抱たら、残る片手が俺の胸に懸らなければ承知能きぬぞ」

「それも判つてゐます」

「ハ、……子供といふものは、そんなにまで可愛いものかなア、それで俺も満足した」

永田は斯う云つたまゝ坐つてゐた。

「貴郎、願ひでございます、同じものならどうか直ぐ會はして下さいまし」

住江はイラ／＼と落着もなく云つた。

「そんなに急ぐな、お前に會はせやうと思つて連れて来たんだ、何時でも會はせる、併し後で間違ひはあるまいな、赤ン坊を抱いた後で約束を變へやうとは云ふまいな」

「え、無論そんな事は致しませぬ」

「それでは茲で云ふ事を諾いて呉れ、赤ン坊を渡す前に間違ひのない證據を見せて呉れ」
永田は斯う云ふとすり寄つて住江の手を取らうとした、住江は蜂を拂ふやうにして、

「貴郎、何をなさるのでございます」

「何もしない、約束を履まうとするのぢや」

「そんな事をなすつては困るぢやありませんか」

「それ、それだから云はぬ事ぢやない、お前は、赤ン坊を取つた上で俺を突き放すつもりだらう」

「いえ、決してそんな……」

「それでなくば、一寸位自由になつて呉れたつて好いちやないか、赤ン坊は次の間へ來てゐる、お前が俺の自由にさへなれば直ぐ會はしてやるぢやないか」

「いえ、赤ン坊を抱かない中は御言葉に従ひません、それが不可なければ私は何時までも斯うしてゐます、此の世ではとても聞く事が能きなからうと思つてゐた赤ン坊の聲を聞

きながら、それを思ひ出して死にます」

住江は言葉強く、斯う云ひ放つと、兩手で耳を塞いで泣き伏した。

「さう云へば詮方がない、俺も今になつて無理な事は云やしない、それでは先づ赤ン坊を連れて來やう」

永田は斯う云つて又立ちかけたが、

「いや、今夜は廢さう、まだ、お前の容子に合點の行かぬ所がある、今夜に迫つた問題ぢやないのだから、お前もよく考へてくれなきやならない、俺もよく考へる、つまり赤ン坊を渡した後心から俺に靡いてくれるのか、或ひは赤ン坊の顔が見たさに心にもない事を云ふのか、俺はそこが疑はしい、だから今夜はこの儘赤ン坊を連れて歸る、さうして明日か明後日かお前の考への定まつた時に再び連れてくる事にしやう、その間によく本心を定めといてくれ」

「ぢや、今夜は會はせて下さらないのでございますか」

「今夜は逢はせない、併し心配するな、赤ン坊に飢るい目はさせやしない、完全に育つて

「ある、お前が見たら驚く程大きくなつてゐる」

「私、少しも早く顔が見たいのですけれど……」

「顔が見たければ決心をなさい、俺の心に従ふつもりになりなさい、兎も角今夜は連れて歸る。二三日の後を楽しんで待ちなさい」

永田は、奥齒に物の挟まつたやうな口上を残して去つた。

(四二)

三人の乳母は各自に養育して居る小供達を抱いて、風通しの好い門の内に遊んで居た。初夏の風が老松の枝の間を竊して、そよ／＼と裕衣の袴を吹く快さを、總領の猛の乳母は飽くまで受けて、

「おかねさん、氣が付いてるの、近頃旦那様のお顔が冴／＼としないぢやないか」と云つた、おかねは操の乳母であつた。

「旦那様ばかりぢやないわ、奥様の御機嫌も斜で在らツしやるわ、お蔭でわたし共まで餘滴を食はされて、こんな割の悪いことは無いぢやないか」

「全體何うなすつたらうかね、今までは随分お睦しい御夫婦間で在らしたのが、急に變な調子にお爲んなすつて……近頃は碌々お談話も爲さらないと云ふぢやないか」

「眞個に異しい、お政さん、何か聞いたことがありやしない」

お政は玉子の乳母であつた、日にましてくり／＼と太つて来る養育兒の可愛らしい面を見入つて、

「何も聞いたことありません、ねえ、お嬢さま」と愛に堪へぬ如く頬摺をした。

「お政さん、知つてる癖に秘すんだわ、お前さん、いつか花代さんを伴れて、築地へ行つたことがあるぢやないか」

「はい、有ります」

「彼の頃から奥様のお顔が曇つて來たわ、あの時、お前さん、どんな話をして來たの」

「別にお話はしませんわ」

「ぢや、何を聞いて来たの」とおかねは熱心な目色をして「大きい聲ぢや云はれないけれど、そのお嬢さま、旦那様のお胤だと云ふぢやないか」

「爾うなんですかねえ、わたし一向存じません」

「さう云ふと眞個に熱く似て在らッしやる、奥様のお顔の曇りも、旦那様の御機嫌の悪いのも、源はその嬢さんに根ざして居るつて云ふぢやないの」

「でも、お嬢さまは奥様が拾つてお歸りなすつたと云ふぢやありませんか」

「其處に魂膽があらうつて云ふものさ、旦那様も其の方に掛けちや隅に置かれないますからねえ」

「これ、何ですよ、大きな聲をして……」

總領の乳母に窘められて、おかねは口に手を當てたが、

「可いのよ、旦那様お不在なのよ」

「旦那様お留守、何時お出かけになつて」

お政は念を入れて聞いた。

「もう一時間はご前……」

「奥様よくお許容が出たのねえ」

「何か急な御用があつたんでせう、慌てたようにしてお出掛けになりましたわ」

お政が四邊をかねて斯う云つたとき、門口からのそりと姿を見せて、

「御免下さい」と云つたのは、脊のひより長い藤澤であつた。

「あゝ、吃喫した、あなた何時お來でになりました」

總領の乳母は目を睜つた、藤澤を見知つて居るのは此の女ばかりであつた。

「今來ました、はゝゝゝ」と藤澤は可笑しくもない事に笑つて「お揃ひで何か可いお談話があるのですかね」

「三人寄つても、文珠らしい智慧は出ませんよ」

藤澤は底光りのする目で、じつと玉子を見詰めて居たが、

「時に御主人はお宅ですかね」と軽い調子で訊いた。

「いね、只今お留守でございます」

「そいつは困つたな」と態どらしく頭をいかいて「遠方へお出掛けになつたのですかね」

「さあ、何様事でございますか」

「御主人がお不在だど、折角お尋ねした甲斐がないが……奥様は何様ですかね」

「奥様は在らっしゃいます」

「ちや、恐れ入りますが、ちよつとお目に掛りたいことがあつて参りました、どうかわたしの來たことを申上げてくれませんか」

藤澤は據ないやうに頼んだ。中にも人の好いお政は心得て内へ入つた。

藤澤は暫くすると、表の應接室へ通された、表の應接室は疏末な日本室で、中央に神代杉の大卓子が置いてあるばかりで、何の飾も施して無い、藤澤は美しい小間使が運んで來た珈琲を一口啜つて、開け放した狭い庭へ陰險らしい目を注いだ、庭は綺麗に掃かれてあつた。時候外れの黄色い蝶が只一羽淋しうに飛んで居た。

物の三十分も待たせてから、雪子は、ぶつてり肥わた色の白い身運んで來た、藤澤と

は無論初対面であつた、全體一面識も無い貧書生に輕々しく面會を許すべきではない、またそんな事をしては貴夫人の對面を傷ける結果になるので、よく／＼の事情があつても、門前拂ひを食はすのが例であつたが、藤澤には是非會はなければならぬ約束でもあるやうに思はれ、また彼に會つたら、何かは知らぬ良人の秘密——で無くても自分に有利な或事件を聞くことが爲きるやうに思はれたので、つい面會する氣になつた。彼女は良人の行動に注意を怠らなかつた、良人と玉子との關係、良人と住江との情緣、夫等について爲きるだけの模索と研究とを積まうと心掛けて居た、そこへ何等かの秘密を知つて居なければならぬ筈の藤澤が突然と尋ねて來たのは、雪子の思ふ壺であつた。

「あなたが奥様で在らっしゃいますか」

藤澤は雪子の顔を見すねたまゝで云つた。

「はい、わたくしが雪でございます」

これを初に一寸した挨拶が取り交される、藤澤は苛々とした語調になつて。

「只今御門内で三人のお小供衆を拜見しました、あれは皆な奥様のお子儀で在らっしゃる

「のでございますか」と訊いた。

「どうも、不思議なお訊ねを受けます事、わたくしの小供で無くて、誰の小供でございませう」

「いね、奥様、わたしは夫をお訊ねするのちやありません、わたしのお訊ねする意味が、奥様によく徹底しないやうですから、更に改めてお訊ねします、三人のお小供衆——あれは皆な奥様のお腹からお舉みになつたお方なんでしょうございますか」

「あなた、其様な事をお訊ねになつて、何うなさるお意でございますか」
「一寸考へるごことがありまして……」

「あなたには何う見えます、三人が三人わたしは舉んだ小供らしくお見えになりますか」
「わたしには爾う見えます」

「すると、彼の中に、わたしの腹を痛めない者が交つて居るとでも被仰るのですか」
雪子の顔は段々と引き締つた。

「まあ爾うですね」

「あなたに爾う見るのでございますか」

「いね、見えます」

「その小供は何方でございますか」

「玉子さん——玉子さんと被仰る彼の赤兒さんが爾うなんぞでせう」

雪子は斯う云ふ藤澤の顔を見据ゑたまゝ、黙つて居た。

「奥さんは、わたしが突然お訊ねしたのを何の爲めだと思召します、いね、さういふ用を帯んで参つたのだと御推量なさいます」

「わたしには分りません」

「爾うでせう、お分りにはならないでせう、處が奥さん」と藤澤に改めて前後を見返つて
「わたしはあなたからお嬢さんをお貰ひする爲めに参つたのです、あなたのお舉みになら
ないあなたのお子さんをお貰ひする爲めに参つたのです」

「まあ」と云つたまゝ、雪子は目を圓うした。

「あなた、玉子の父を御存じて居らッしやるのですか、眞成の玉子の父を……」

雪子はまた黙つた。

「わ、奥さん、わたしは此のお答へをあなたのお口から得たいと思ひます、そして改めてわたしの要求する處が申し上げたいと思ひます」

藤澤の詞は、雪子の膽へ食ひ入るほど力強かつた。

「拾ひ兒ですもの、真成の父の名なんぞ分つて居るものですか」

暫くすると雪子は投げ付けけるやうな語調で云つた、藤澤は相手の言葉がこゝへ落ちて来るのを待つて居たやうに、

「やつぱりお拾ひなすつたのですか、爾うですか、夫を承はつて、わたしも用件を申し上げるに非常な便利を得る理です、實は奥さん、これは絶対に秘密ですが、玉子さんの父は石川翠波先生です、わたしの師と崇めて居るお方です」

「ちや、翠波さんと住江さんの間に舉きた——」

「其處までは申し上げませんけれど、翠波先生の胤であることだけは眞實です、長くお世話になつて、突然こんな事を申し上げるのは恐縮ですが、現在血を分けた娘を他人の奥さ

んへお任せして置くのは面白くない、同じ物なら手許で育てたい、どうか受け取つて来て呉れないかとの依頼を受けて、態々御無心に參つた理です、切角お乳母さんまでお付けになつて、御養育下さる處へ、唐突にこんな事をお願いするのは心ない術ですが、御恩は御恩でお返しする時があるだらうと信じます、まことに恐れ入りますが、どうか絶対文句無しに、翠波先生の要求をお肯き下さるやうに願ひます」

藤澤はまた口癖の絶對を出しかけた、雪子は黙つて聞いて居たが、藤澤の話に多少の疑ひを持ちながら、

「わたし、あなたの被仰ることがよく分りません、翠波先生は立派な青年畫家ぢやありませんか、その若手の畫伯先生が、肉身のお嬢さんを暗の道傍にお捨てなさるなんて、わたしにはどう考へても合點が參りません、ですから此の御返事はもう少し待つて戴きたいと思ひます、それに良人も留守ですし、外にも一寸相談のしたい人がありますから」と奥齒に物の挟まつたやうな言を云つた、雪子は藤澤を良人の間諜兒では無いかと疑つた、翠波の使者と偽つて、玉子を彼の手へ引き上げる算段ではないか、と邪推した、彼女の胸の底

には、今もまだ「清野と住江との間に擧げた罪の子を背負ひ込んだのではあるまいか」との心が除かなかつた、もしさうした皮肉の計略に罹つたのであつたら、家付の娘たる權威をもつて、清野に對する復讐を爲なければならぬ、と思つて居た。

そこへ藤澤がひよつくりと遣つて來て、玉子を引き取りたいと云ひ込んだ、雪子の心は悪い方へ悪い方へと動いて「拾ひ兒の底が割れさうになつて來たから、こんな詰らん男を遣つて、わたしの手から彼の兒を奪り返さうとするのだらう」と思ひ解んだ。

彼女が藤澤の言ふ事を善い方へ取らぬのは爾うした邪推があるからであつた、こゝで玉子を藤澤へ渡すのは、見すゝ良人の計略に掛るのであると思ふ不安な考へがあるからであつた。

藤澤はそこまで深く考へて居なかつた、たゞ赤兒が手に入れて歸りたかつた、赤兒さへ伴れて歸つたら、それで任務は盡せるのであつた。

藤澤が誰に頼まれて、突然玉子を受け取りに來たかを、こゝでくゞ説明する要は無かつた。

「御主人なんぞお來でにならなくつても好いちやありませんか、玉子さんはあなたのお子ぢやありませんか、何うしやうとあなたの御自由ぢやないですか」

「いね、さうは参りません、翠波さんへお渡しするにしても、一度よく相談をしませんでは、わたくしの一存で取り計らふ理には参らないのでございます」

雪子はぼんと云ひ切つた、藤澤の目は陰險な目をもつて動いた。

「それなら宜しい、それなら強てとは申しあげません、あとで御後悔のないやう御注意なさい、わたしは引き取ります」

斯う云ふと思ひ切りよく立ちかけた。

(四)

非常手段の下にやつと我が手に玉子を奪ひ取つた藤澤は、永田への打ち合せの爲めに電話をかけて、やがていそぐと電話室を出た、彼の顔に慾望の光りが満ちた、急いで元の

部屋へ入らうとして、間の襖をさつと開けたが、同時に一步後へ退つて、

「あッ」と云つたまゝ立ち縮んだ。

部屋には翠波が居た、蓬々と伸びた髻の間に、物凄く笑ひを見せて、玉子を兩手に抱いて居た、今外出から歸つた處らしく、新しい蓑蓑帽を被つて、酒氣を帶んだ唇から、はッくと太い息をして居た。

「先生、いっつお歸りになりました」

藤澤は恐ろしい物にでも觸るやうに云つた。

「今歸つたよ」と翠波は平氣で答へると、玉子を抱いたまゝ、奥の間へ行かうとした。

「先生、その赤兒ちゃんを何うなさる、その赤兒ちゃん、これから……」

「何うもしない、彼方へ伴れて行く」

「夫では困ります、赤兒ちゃんはお乳母さんの赤兒ちゃんです、今受取りに来るでせう」

「戲言云つちや可けない、これは乃公の赤兒だ」

翠波は云ひ捨てると、廊下を奥の間へ行きかけた、藤澤は掌の中の珠を奪られでもした

やうに喫驚して、

「先生、違ひます、あなたの赤兒さんちやありません、わたしが預かつて居る赤兒さんです、ごうかお渡し下さい、先生々々」

追ひ縋るやうに呼びかけたが、翠波は耳にも掛けず茶の間へ入つて、火の氣のない火鉢の前へ坐を占めた。

「先生、お渡し下さい、それでは絶対に困ります」

「いや渡さん、これはわしの子だ、いつか行方の知れなくなつたわしの子だ、もう何處へも渡すことぢやない」

「先生のお嬢さまちやありません、清野さんのお嬢さんです、お乳母さんが付いて居る大切なお嬢さんです」

「馬鹿を云へ、乃公にも目がある、君の手に乗つて堪るか」

「困るですなあ」

「困ることはない、乃公の子だから乃公が育てる、なあ赤兒」

翠波は不器用な手で横抱にして、幾度も／＼頬摺をしながら、玉子に愛を運んで居た。

「先生酔つて在らッしやるんですね」

「酔つてるかも知れない、然し、自分の子と他人の子を見違へるほど盲碌はしやせんよ」

「ですが、實際先生のお嬢さんおやありません、熟く注意して御覽なさい、清野さんのお嬢さんです」

「まあ好い、これが清野の子だつたら、尙のこと返さない、乳母が來たら呼びたまへ、わしが引導を授けて遣る」

翠波は容易に渡さうとしなかつた、そこへ仲働きのお鐵が出て來た。

「おや、お歸り遊ばしまし」

翠波は見向いても見なかつた。

「お鐵どん、君に頼みがある、先生の手から彼のお嬢さんを取つてくれ、先生意地が悪くて仕様がな」

「何うなすつたのでございます」

「わしが他から預つて來てるお嬢さんを横奪してお終ひなすつたのだ、今にお乳母どんが迎ひに來るだらう、その時、絶対に困るんだ」

「お鐵々々」と翠波は思ひ出したやうに呼んで「この兒の牛乳を取つて來い、序にわしの飲む牛乳も取つて來い」

「はい、ですけれども……」

「何でも可い、乃公の命じる通りにしろ、此は乃公の子だ、どこへも遣らない、誰へも渡さない」

お鐵は翠波の權幕の恐しいのに膽を冷して、おど／＼しながら立つて行つた。

「先生、そんな事を爲すつて好いのですか」

「藤澤は聲を尖らせた。

「悪ければ警察を呼んで來い、お前の言ふ事は信じない、彼方へ行け／＼」
玉子は翠波の顔を見て笑つた、藤澤は取りつく島が無かつた。

藤澤が玉子をこゝまで奪ひ出すには、可なり危険を冒して來た、最初は雪子を欺いて、應對づくで取らうとしたが、雪子が其の手に乗らなかつたので、遂に第二の策略を用ゐるに至つた、第二の策略は、乳母のお政が玉子を抱いて、何氣なく門口に佇んで居る處を、不意に攘き奪ひ取るのにある、奪ひ取つて逃走を企てるのである。

第一の策略に失敗した藤澤も、第二の策略には首尾よく成功した、彼は毎日清野の家の前を徘徊して、お政の隙を伺つて居た、お政はそんな事があらうとは毫も知らない、玉子は朝の機嫌の悪い癖があるので、起きるとすぐ袖に抱いて、門前の涼風に當つて居る處を兼て計つて居た通り駆け出して、難無く我手へ奪ひ取つたのであつた、お政は不意の襲撃に驚いて『あッ』と云つたまゝ後を追つたが、それは何の甲斐も無かつた、三越の前に待たせて置いた俵の乗つて、雲を霞と逃げ伸びた。

彼が玉子を手に入れるべく、此ほど努力を費したには、其處に深い理があつた、藤澤は赤兒の必要はない、けれど金の入用はあつた、玉子を奪つて永田の手へ渡すとき莫大な報

酬は彼の手へ入るのである、彼は金が欲しかつた、その爲めに永田の無理な頼みを肯いたのであつた。

住江の手から赤兒を奪つたのは永田であつた、こんな者が付いて居ては、戀の邪魔になると思ふ一心から、鬼の様な仲働の手で花の蕾を見るやうないたいな小供を濠端線の暗の夜に捨てさせた、けれど夫は永田の考へ違ひで、その策略は何の益にも立たなかつた、却て住江を悲嘆の底へ突き落す意外な結果を見るに止まつた、然も今日になつて見ると、住江の心を屈服させるには、赤兒を道具に使ふ他無いのであつた、赤兒の愛に由つて、住江の心を引き付ける他、永田の望みを遂げるべき道は無かつた。

そこでまた急に赤兒の必要を感じて來た、けれど赤兒の所在は知れなかつた、彼方此方搜索の手を盡した末、不圖藤澤に話して見ると「それなら僕に成算がある、成就の曉はいくら報酬を下さるか」と云つた、大きい事にはそれほどの成績をあげ得ないが、小さい事には可なり役に立つ枝倆を持つて居るのを知るので、永田はすぐ成功謝金の額を打ち出した、もし玉子を生のまゝ永田に手渡して呉れたら「金一千圓也の禮をする事」に契約し

た、一千圓は藤澤に取つて大金であつた、彼が活動を始めたは其の以後である。

「赤兒を抱くことが爲きさへしたら、きつとあなたのお詞に従ひます」と住江は云つた、暴力をもつて思ひを遂げるのを、男の耻辱と思つて居る永田は、住江の此の詞を聞いて、己の世界の開いて來さうになつた幸運を歎んだ「こんな事なら赤兒を捨てるのぢやなかつた」と思つたが、それでも藤澤の手で首尾好く手に入れることが爲きたら、千圓や二千圓は惜むに足らぬと歎んで、毎日毎夜藤澤の便りを待つた。

その藤澤から「お約束の物が手に入りましたから」との電話を受けたとき、永田は胸懷をするやうな歡びを感じた。

「それは有難い、どうかすぐ例の處まで伴れて來てくれ、約束の金は赤坊と引き換へに渡すから」と云つた、例の處とは、斯うした不良の相談場所に當て、居る中澁谷の某料理屋であつた。

永田は某料理屋へ云つて待つた、赤兒が手に入るのは、或意味に於て多年の戀が成就するのであるから、満面に笑を漾へて居た、藤澤にも御馳走をするつもりで、澤山な料理を

注文して、其して自分は祝ひ酒をぐびりぐと飲んで居た。

すると、午時少し過ぎる頃、藤澤は眞蒼な顔をして遣つて來て、

「どうも飛んでもない事をしました、その足ですぐお尋ねすれば好かつたのを、何處へ參つて可いか分りませんので、一寸家へ歸つたのが不覺でした、切角伴れ返つた赤兒を翠波に奪られて終ひました」と報告した。

永田は顔の色の變るほごに驚いた。

「君も案外馬鹿だなあ」

永田は怒氣を含んで云つた。

「何とも申し理ございません、然し、長い事はありません、今に放します、どうして長く持つて居るのですか」

藤澤は高を括つて云つた。

「君は爾う云ふが、未來のことは分りやしない」

「いや、分ります、翠波には赤坂に良いのがあります、夫を捨てさいて何時まで内に居る

「ものですか、また赤兒を伴れて女の側へ行く者もないでせう」

「さうだ、翠波には玉子が付いてる、然しこれも異しいものだ、わしは仔細あつて玉子の心意氣をよく知つて居る」

「でも、先生は有胆天ですせ」

「夫だから可憫さうだ、然し、他人の事は何うでも可い、赤兒の事を何うしてくれる、君が此處へ來てる間に、何うかして了やしないか」

「其點は大丈夫です、一味の女中に頼んであります、わたしの居ない間に、先生が赤坂へ行くのでしたら、その女中が抱き取つてくれる筈です」

「清野から追人の者が行きやしないか」

「その御心配には及びません、わたしが先生の家に居る事を知つた者は無い筈です、どうか明日まで待つて下さい、御約束通りにお渡し爲ます」

「然し、君の言ふことはかりを信用する理には行かない、假し信用するにした處で、翠波がいつまでも赤兒を放さなかつたら仕様がなないぢやないか、玉子の處へ行くだらうと思つ

て居ても、玉子が横を向いて居るかしれない、恐らく翠波は、自分に背いた玉子の姿を見てるだらうと推量される、すると當分は外出をしないか知れん、その時は困つて終ふ」

「すると先生、玉子にも捨てられて終つたのですか」

「或は爾うぢやないかと思ふ」

「よく／＼女に縁の無い人ですね」

「だから玉子の關係などは當にしないで、此方は此方の方法を考へなけりやならない、ぞうだ、もう一骨折つてくれんか」

「一骨折ると云ひますと……」

「翠波から赤兒を奪うんだ」

「夫が中々思ふやうになりません、今までは赤兒の事なんぞ氣にしない方でしたか、どうしたものか今日は確乎と抱いて居ます、威赫しても賤しても放さうと云ひません」

「其處に方法があるだらうぢやないか、僕も或る事情から急を要する、今夜僕を手引してくれ、僕みづから乗り込んで、翠波の懷から奪つて見せる」

「あなたお入來になりますか」

「さうでもしなければ限が無い、君が手引さへして呉れりや、その上の仕事は僕がする。高の知れた瘦書生だ、いくら放さないと云つても、僕の腕に自信がある、美事に奪ひ取つて見せるよ」

「あなたが爲さるや雑作ありません、ぢやお入來になりますか」

「十二時を期して行く、その時君は巧く手助けをしないと行かんど、兵は迅速を貴ぶ、ハツと云ふ間に目的を遂げて終ふ」

「御命令通り何でも遣ります」

「自動車其の他はわしの手で都合をするから、君は翠波に酒を飲ますんだ、そして泥々に酔はして置くんた」

「その位の事は爲きます」

「それで赤兒を手放して寝て終へば刃に斬つて功を収め得るんだが、もし執念深く抱きしめて居るやうだと、二つ三つ鐵拳を食はすか知れない、夫が目つぶしだ」

「その時わたしは何うします」

「聲を擧げないやうに口を蓋するんだ、翠波が倒れるときは、僕の手へ赤兒を奪るときだ後は雲霞、自動車が僕と赤兒とを隠して呉れるさ」

「宜しい、金にさへなる事なら何でもします、厄難な人間ですが、思ふさま使用つて下さい」

二人の密談が段々と進んで行つた。

(四三)

翠波は涼風のよく通る座敷の縁に蹲つて今年竹の翠に映る夕陽の光を見つめて居た。彼の懐には赤ン坊が抱かれて居た、牛乳に飽いてすや／＼と眠つた目許が、翠波には或床しい記憶を呼び起させて、凄まじいほども凹んだ目の中に、昔の戀が燃え立つた、此の時小間使が駈けて来て、

「先生、お客様でございます」と知らせた、翠波は思ひ掛けぬ事を聞いたやうに背後を見
た、そこへのそりと入つて來た絶えて久しい友があつた。

「おい、何うした」

無難作に斯う云つて、翠波の側へ近寄ると、同情に漏んだ目を向けた。

「杉本か、久しいな」

翠波は莞爾ともしないで云つた。

「實に久しい、貴様何うして生て居た、おれはもう死んでるだらうと思つて居た」

「此の様子ぢや死んだと云ふ方が適切かも知れない、まあ坐れ、久しぶりに君の快活な話
でも聞かう」

杉本は斯う云ふ翠波の面をじつと見て、

「相變らず沈んでるなあ、それぢや生てる甲斐がない、どうだ、もう一度自分の世界へ歸
つて見る氣は無いか」

「乃公の棲む世界は無い、乃公は總てから捨てられた、杉本、恕してくれ、乃公は貴様の

忠告を聞く耳を持つて居なかつた、その結果が此處へ落つた」

「既往事を云ふな、昨日は再び來やしない、然し翠波、過ぎた道を引き復すことは爲さる
ぞ、一たん踏み出した道は、何處までも進まなければならぬといふ理屈はないぞ、君は脚
を無くしやしまい」

「總てを無くした、乃公の手には何も無い、あるのは親父の遺した金ばかりだ」

「夫さへありや結構だ」

「なに、結構なことがあるものか、乃公を過らせたのは金だ、金が乃公を深い穴へ突き入
れたのだ」

「異しなことを云ふねえ、然し、君がさう思つて居りや夫にして置かう」杉本は赤ン坊に
目を付けて「君の抱いてるのは何か」

「乃公の兒だよ」

「すると、臍どか命けた彼兒か」

「多分さうだらうと思つてゐる」

「夫なら住江さんが舉んだんだ」

「何うかなあ、其處までは考へない」

「他に君の子は無いぢやないか」

「有るかも知れない、無いかも知れない」

「そこで住江さんは何うしたのか、赤ン坊を伴れて逃げたとか聞いたが、赤ン坊と一所に歸つて來たのか」

「住江の事は云つてくれるな、乃公はもう忘れて居る」

「ぢや、住江さんは歸らなくて、赤ン坊だけが歸つたのか」

「兎も角父は乃公だ、けれど誰の舉んだ兒か夫は知らない、また夫を知る必要はないと思ふ」

「君の詞で大略を推量ることが爲きた、此上は多くを云はない、過ぎ去つた事は尤もないどうか眞人間になつてくれ、元の道へ復つてくれ、乃公は君の路頭に迷つて居るのを見て衷心から氣の毒に感じて居る、君も書壇の天才をもつて許された男ぢやないか、一管の筆

を取つて社會民衆の爲めに氣を吐かうと思ひ立つた人間ぢやないか、途中で碎けて何うする、一婦人の爲めに將來を誤つて何うする、お互に日本人だ、君の肩にも乃公の肩にも日本國の全部が負さつて居る、乃公や君がぐらつくのは、取りも直さず日本國がぐらつくのだ、確乎しろ、今の時を何の時だと思ふ、ぐづ／＼して居る場合ぢやない、眞正の生活に歸れ、眞正の人間に立ち戻れ、貴様も乃公も日本人だぞ」

杉本は強く力付けるやうに云つた、翠波の目に涙が浮ぶ。

「乃公は迷つて居る」

「だから目を覺せいふのだ、心の目を覺せいふのだ」

翠波は亦ン坊の頬の上へ、滴々と熱い露を溢して、

「考へると此奴が可憫さうだ、君どうかしてくれないか」

「諾し」と杉本は大きく頷いた。

「赤ン坊は乃公が引受けやう」

「おゝ、貴様引受けしてくれるか」

斯う云つた翠波の目に歡喜の色が輝いた。

「引受けなくて何うする、其の位の事を盡すのは當然だ、乃公と貴様は友達だぞ、親友だぞ、友達に心を分けた兄弟だぞ」

「どうか頼む、さうなれば僕も安心だ」

翠波の目に感謝が浸潤んだ。

「乃公には妻があつて兒がない、君には子があつて妻がない、これも何かの因縁だらう、はゝゝゝ」

と杉本は大笑した。

「大きに爾うだね」

翠波も吊り込まれて、久し振に笑を見せた。

「さあ、赤ン坊を貸せ」

杉本は大きい手を突き出した。

「有難う、では、君に此の厄介兒をお願いする」

不器用な手付で抱いて、杉本の手へ渡すとき、赤ン坊の衿の上へ熱い涙が一滴落ちた、杉本は抱き取つて、

「争はれないものだなあ、何處か住江に似て居るなあ」

「もう其の事は云つてくれるな」

「然し、貴様に似た點は無いやうだ」

翠波は厭な顔をした、杉本は悪いことを云つたと氣付いて、

「だが、小供の時は分らんよ、いつ何う云ふ表裡で、どんな處が似て來るかもしれやしない」

「おいゝゝ」と翠波は何かを思ひ出したやうに大きく呼んで「赤ン坊は貴様が貰つてくれた」

「あゝ、貰つて置く、君の必要のあるまで貰つて置く」

「序に金も貰つてくれんか、乃公は赤ン坊よりも金の始末に困つて居る」

翠波は異なことを云ひ出した。

「金、金？」

「さうだ、乃公に金の必要はない」

「必要はなくても、持つて居て邪魔にはなるまい、殊に君の伎倆で利けたのぢやなくて、お父さんが遺された大切な財ぢやないか、疎末にすると罰が中るぞ」

「赤ん坊は貰つてくれても、金は貰つて呉れんのかなあ」

「金は斷る、赤ん坊に親みがあつても、金に親みがない、赤ん坊の血は温いが金の肌は冷たい、乃公は冷たい物を好まない」

「すると、貴様も金の謳歌者ではないのか」

翠波は同主義を得た嬉しさに目を輝かした。

「残念な事に乃公は金を使ふ術を知つてないのだ、乃公の嬢は多少の育兒學を修めて居るが、乃公はまだ使金法を學んだ事がないのだ、世間の奴等は金を利用することのみを知つて金を使ふことを知らない、金を作ることにについては凡ゆる智慧才覺を絞るけれど、金を使ふことについては、何の智慧も分別も持つて居ない、一萬圓を儲ける爲めに、死生ハ巷を

出入するものもあり、十萬圓を利用する爲めに危く法律の網を潜るものすらあるが、さて爾うして儲けた金を使ふについて、少しの用意も持つて居ないのを乃公は見受ける、金を作つた奴等が第一に持つのは美しい妾、それから別荘、それから新書、それから茶道具、性質の悪い奴になると、博奕をしたり、買占をしたりする、で無くば石瓦を抱へるやうに抱へ込んで、ちつとも金を働かせない、儲ける時の人間と、使ふ時の人間とは、まるで別人を見る感がある、世の中にこんな馬鹿氣な話はない、妾を置いたり、新書を買ひ込んだりする爲めに、命がけの働きをして金を作らずともぢやないか」

「大きに爾うだ」

翠波は飛び上るやうな聲で答へた。

「では云ふ者の、乃公も金を使ふ道は知らない、乃公に金を持たせても、下らぬ書工の書いた書に一萬兩二萬兩を投りだすやうな馬鹿をするか知れん、だから當分金はお斷りだ、はゝゝゝ、又金を使ふ方法を考へたら取りに来る」

杉本は腹の底をさらけ出すやうな聲で笑つた。

「金なんぞ何にも爲りやせん、有つても無くても同じことだ」
翠波は暫くして云つたが、一寸考へて、

「實は乃公も金を使ふ方法を知つてないのだ、貴様にはまた云はなかつたが、大分赤阪へ持ち込んで、天下の通寶を反古同様に使つて終つた」

「その事も聞いて居る」

杉本は眞面目に頷いた。

「然し、何んだよ、金の力は知れたものだよ、世間の者が買ひ被つて居るほど、有力なものぢやないよ、つまり口先だけのお世辭を引き出すぐらいが關の山だね、高い新書や、高い茶道具を自分の物にするだけ位の力しか持つて居ないね」

「それは金の力を一部分しか出さんからだよ」

「出さんのぢやない、出す道を知らないのだ、實を云ふと、乃公にもまだ四五十萬の金がある、然し、その金をもつて何うしやうと云ふ當はないのだ、乃公の爲めには、四十萬五十萬の金よりも、一本の筆の方が貴いのだ、一本の筆さへあればこれで乃公の天分を盡す

ことが爲さるんだ、乃公は筆を使ふ道を可なり知つて居る、けれど金の使ふ道はちつとも知らない、恰ど足萎が自轉車を珍重がつて居るやうなものだ」

杉本は嬉し涙を頬に傳はせて、

「貴様、まだ夫だけの覺悟をもつて居たのか、貴様まだ心まで腐らせて居たのぢやないのか、乃公は百萬圓を得たよりも、貴様のその言葉を嬉しいのだ」

片手で赤ん坊を抱いて、片手に翠波の手を握ると、感激の力をじつと籠めた。

「然し、此のさき何うなるか知れないぞ、乃公は今眞暗な世界に住んで居る」

「そんな事を云はないで、どうか眞人間になつてくれ、立派に筆を用立て、くれ」

「有難う、然し……」

「赤ん坊は預る、けれど貴様の心は預らない、貴様の心は貴様自身が好い方へ導いて行く外ないだらう」

「赤ん坊は貴様に頼む、金は銀行が預つてくれる、残るは乃公だけだ」

「どうか、眞成の生活をしてくれ、逃げる者の長追をしなideくれ」

「おゝ」と肺腑から出る聲で云つたが「然し、飲むぞ」

「飲むのは可い、飲まれない用心をするが肝要だ」

男の心の香が、簾の内に満ち渡る、赤ん坊は餓を訴へて泣き出した。

「腹が減つたんだらう、牛乳でも取らせやうか」

「いや、早く歸つて妻の手に渡さう、その方が赤ん坊も幸福だ」

「細君に宜しく頼む」

「その内に君も来いよ、心を持直して立派な書を作れよ、丹青を外にして、君の住む家は無いだらう」

「何うなるか知れない、然し、貴様の誠心は忘れない」

「左様なら」

杉本は泣入る赤ん坊を横向きにして立ち上つた。梅雨の間を吹く夕風が、今年竹の葉末を渡る。

「おゝ、左様なら」

杉本は赤ん坊の泣聲に苛立たされながら、急ぎ足に出て行つた、翠波は後れずに玄關まで見送つた、そして杉本のうしろ姿が升字形の門を出て行くのをじつと見たがそのきらくと光る瞳孔は涙の底に浮いた如く漾つた。

「杉本有難う、禮を云ふよ、石川翠波謹んで禮を云ふよ」

はら／＼と頬から鈴に傳ふ涙を兩手で拂ひ除けながら奥の間へ歸ると、竹簾を通して、夕陽の影に座をしめて、暫くは男泣きに泣入つたが、突然と顔を擡げて、

「おい、酒だ、酒を持って来い、早く持つて来い」

遠い臺所でお鐵がはいと氣の無い返事をした、とたんに六時の時計が鳴つた。

(四六)

翠波は熱い銚子を取り替へ引き替へして飲んだ、仲働きと小間使どが替る／＼酌に出たが、翠波は談話一つしないで居た、伸びたい儘に伸びた髭の間から、白い齒をびかり／＼

光らせて、時々その齒から息を吸つた、酒の色は充血した目の中にのみ出て、顔の色は蒼く物凄く變るばかりである。

「今夜の先生は、宛然芝居の清玄よ」と小間使は戰慄をして云つた。

「でも櫻姫が金ちやんちや物にならないわ、いつも赤阪へ電話を掛けちゃ何う」

「そんな事を云ふと叱られますよ」

「まさか爾うでも無いでせう、よつばど御機嫌の悪いときでも、赤阪のお話を爲始めるとほく／＼お笑ひになつて居たわ」

「夫が今夜は大違ひ、わたし御機嫌を取るつもりで、赤阪へお仿車を命じませうかと申し上げたら、何を云ふのか、馬鹿ッて、頭から噛み付けられたわ」

「お前さん、言ひやうが悪いからよ、わたし申し上げて見やうか知ら——でも彼の様子でいつまでも飲まれて居ちや大變ぢやなくつて……」

「單個に困つて了ふわねえ」

「いつも赤阪からお迎ひに来てお貰ひしやうぢやないか」

「夫が可いかも知れないわ、わたし共ぢやとても御機嫌を取る事が出来ないからね」

「兎も角お銚子を持つて行つて、御機嫌を伺つて見ませうよ」

おてつは銚子を持つて奥の間へ行つた、今年竹の庭が暗く墨を流したやうになつて、簾越しに照る淋しい電燈が、葉末の露を玉にした、翠波は縁側へ半分ほど身體を流して、徳利の袴を枕にすや／＼と眠つて居た、冷え切つた酒の香が、翠波の周圍を取り巻いて、十時近い夜の氣分が、深い軒の中に見えて居た。

「能く寝て居らつしやるのよ、彼なら邪魔にならなくつて可いわ」

「お風邪を召しやしないか知ら……あなた、何かお着せして……」

「あゝ、搔卷をお被せ申して置いたの」とおてつは思ひ出したやうに「藤澤さん何うしたらう」

「また何處かに泊つて来るのぢやないか知ら……」

「今夜はきつと歸るのよ、歸らなけりや爲らない理があるのよ」

「さう、何うして？」

「わたし、頼まれてることがあるの、だけど……」

云ふとき、茶の間の瓦燈口から首を出して、

「お鐵どん」と叫んだは藤澤であつた、酒氣を帶んで居るらしい目に不審を立て、「赤ちやんは何うしたね」

「あゝ、お歸りなさい」

お鐵は斯う云ふ中に立つて、藤澤を玄關へ引張つて來た。

「赤さんは居ませんよ」

「何うしたのです、何處へ遣つたのです」

「わたし、その時はお臺所に居て、深い事情は知らなかつたけれど、杉本さんが伴れてお歸りなすつたやうですよ」

「え、杉本が……」

藤澤は暗い顔をした。

「それもよくは解りませんけれど……」

「君も頼み甲斐がないぢやないか、さつき彼はど頼んで置いたものを……」

「だが、詳しいことは分りませんわ、わたしお臺所で用をして居て、ひよいと奥へ行つて見ると、もうお妾が見えなかつたんですもの」

「杉本が伴れて歸つたに間違ひはないのかねえ」

「他に誰も來た人はないのですから、杉本さんがお伴れなすつたらうとは、思ひますけれど……」

「先生は寝てるやうですわ」

「大變御機嫌が悪いのですよ、あのまゝ寝かせて置いた方が好いでせう」

藤澤は斯う云ふおてつの詞を聞かうともせず、苛々とした素振で奥の間へ進み入つた。

「先生 先生」

藤澤は翠波の肩胛に手を掛けて揺り起したが、翠波は死んだやうになつて動かなかつた、また目を覺まさうともしなかつた。

「先生、先生、わたしです、藤澤です、お嬢さんの事について、一寸お尋ねしたいことがあるんですが……先生、先生」

執拗く二三度も揺り起すと、翠波はその手を拂ひ除けて、

「煩厭い、彼方へ行つてろ」と叫んだ、けれど藤澤はそれにも恐れないで、

「先生、ちよつと起きて下さい、あなた赤兒ちゃんを何處へ遣つたのです」とまた聞いた
「知らんよ」と鋭く弾き付けるやうに「何處へ遣らうと乃公の勝手だ」と恐ろしい目で睨み付けた、

「ですけれど……わたしが預つて歸つたのですから……」

「馬鹿を云へ、其方へ行け」

「先生、あなたの様なことを爲すつちや實際困るですなあ、赤兒ちゃんはわたしが……」
藤澤が不平らしく斯う云ひ掛けるとき、おてつが次の間の薄暗がりから顔を出して、

「藤澤さん、お客さまですよ」と執次いだ。

藤澤はその客は誰であるかを確めるまではなく分つて居るので、

「さうか、もう來たのか」と云つて玄關へ駆け出した、翠波は仰向に寝たまゝで、その背姿を見送つたが、

「馬鹿、醜態を見ろ」と呟くやうに云つて目を閉ぢた、やつと西へ廻つた月魄が、竹の間から清く照つた。

永田はインパネスをぞろりと着て、玄關の式臺に立つて居た、藤澤はびよこゝと二つ三つ叩頭をして、

「居ませんよ、赤ン坊は居ませんよ」とさも面目なげに云つた。

「何うした、清野へ取返されたのぢやないか」

「いや、爾うでは無いやうです、大體見當は付いて居ます、何うか明日まで、待つて下さい」

「困るな、君の爲ることは何時も此れだ」

「實に意外でした、わたしも歸つて來て驚いて居るところです」

「翠波は居るか」

「酔つて寝て居ます、然し赤ン坊は影も見えません」

「異しいぢやないか」

「明日まで待つて下さい、明日はきつと伴れて行きます」

「確乎頼むぞ、君の不注意の爲めに、馬鹿を見せられるのは乃公ばかりだ、自動車の運転手に對しても面目ない」

永田は不機嫌らしかった。

「御道理です、明日は必ずお手渡し致します」

「眞成に居ないのか」永田は疑ひ深い目を奥へ放つた。

「眞個に居ません、これには理由がありさうです」

「何處かへ隠したのぢやないかねえ」

「何方にしても大略の見當はついて居ます、明日の晩は吉左右を持つて例のところまで伺

がひます」

「君も當にならんからなあ」

「今度は大丈夫です、どうか御安心なすつて下さい」

永田は、折角樂んで來た甲斐も無く、絶望を抱いて歸らなければならなかつた、赤ン坊を手に入れる事は、直に戀の成就を意味する、その赤ン坊が手に入らうとして當事の外れた事は、戀の前途を暗にするのである、どうしても行かなければ止むを得ず暴力を用ゐる外あるまい、住江に對する感情は戀から意地に轉つて居る、意地を貫くに手段も何も要るものかとは思ひながら、同じことなら納得づくで手に入れたい、永田はその覺悟に満足させたい爲め、これほどに奔走し盡力するのであつた。

頼み難い藤澤の詞を頼んで、要領を得ず歸らねばならなかつた、永田は幾度も念を押して悄々と辭し去つた。

玉子の行方が突然分らなくなつたについて、清野の家庭にも暗い霧が立ち籠めた。それは雪子の回り氣から「旦那が玉子を連れ出したのぢやないか知な」と思ふ邪推にきざした。

乳母のお政がさながら半狂亂の如になつて、

「赤兒ちやんを奪られました、どうしませうく」と茶の間へ泣き込んで來た刹那から、必然さうであらうと疑つて居た。

それでお政から當時の一伍一什を聞いて、

「騒ぐこともありません、心配することはありません、赤ン坊の行くさは知れて居ますその中に旦那がお歸りになつたら、きつと行きさを突止めます、お前は安心してお在で」と云つた。

清野は終日留守であつた、銀行は重要な會議があつて、朝早く出たのであるから、まづ電話を掛けて、此の一大事を報告せねばならぬ立場にありながら、雪子は故意と知らさう

としなかつた、彼女の心の奥底には「銀行の重役會議といふのも、好い加減の事か知れない、さう云つて外へ出て、他人の手に赤ン坊を奪はせたのだらう」と疑つて居た。

「今頃は住江と三人で、水入らずに楽しい境界を作つて居るだらう」

進んでは斯うも思つた、すると、今日まで努力をして、玉子を養育して來たことが馬鹿々々しくて堪へられないやうに思はれて來た、偶然に拾つた子供でありながら、清野と住江とが豫め計つて、その身の通行する路側に捨て、置いたやうな想像さへ逞しうされた、

「わたしが云ひ出すまで、此の事は旦那の聞に入れないでお置き」

全使用人に對して、雪子から斯うした命令が下つたは、その日の午後二時頃であつた、不意の出來事で、殆んど不可抗力とも云ふべき状態の下に奪ひ去られたのであつたから、何うする事も爲さなかつたと云へ、お政はその身に對する重く深い責任を感ずる心から部屋へ退つて泣いてばかり居た」

「今にも旦那様がお歸りになつたら、何う云つてお説をしたものだらう」と思ひ續ける中に、いつとなへ日が暮れた。

それに清野は歸らなかつた。

清野からは「會議の都合で少し遅くなる」旨の電話が掛つた、それは實際に違ひなかつたけれど、雪子は眞實と思はなかつた、首尾好く赤ン坊を奪ひ得た歡びに日の暮れるのも忘れて、楽しい一日から楽しい夜へ入るのであらう、と思つて居た、それほど彼女は神経的になつて居た。

清野の歸つたのは、夜の十時過ぎであつた、會議が終つてから晩餐會の開かれた席上の酒の香が、一層雪子の心を尖らせた「あなたさを御満足でございませうね、お好きな方へお嬢さんがお歸りになりました……わたくし眞成に歡び申します」

雪子は顔を見るとすぐ云つた、清野は何の事か分らなかつた。

「わしには解らない、それは何を云つてるのかね」

清野は意外を感じて訊いた。

「でも、わたくしに一言ぐらいお禮を被仰つてもお宜しいぢやございせんか、何にも知らないで、半年以上も手摺にかけて居たのでございしますもの、考へるとこんな詰らない事

はございせん」

清野は、必然玉子の事を云つて居るのだな、と氣付きはしたが、まだよく事情が分らぬので、

「わしにはますます解らない、玉子が何うかしたのかね」

「あなた御存じなさらないのでございしますか、まあ何うも不思議ですことねえ、玉子は今朝誰かに奪はれて了ひましたよ」

「えゝ、玉子を……何時何うして……」

「夫はわたくしよりも、あなたが熟く御存じなんぢやございせんか」

「そんな事をわしが知るものか、詳しく話して下さい、何處で、誰に奪られたのです」

清野が、聽いて問ひ返すのを、雪子は恐らく狂言だらうと思つて聞いた。

清野はお政を呼んで委細を訊いた、お政は事實を語つてのち、

「その人は石川さんのお宅に在らッしやる書生さんのやうでございました、まるで稻妻の如に素敏くお通げになりましたけれど、わたくしお顔だけは見て置きました」と云つた、

「石川の書生——すると藤澤とか云ふ彼奴かな」

清野は總を意外に感ずるばかりであつた、お政の言ふが如く、之れが果して藤澤であつたとして、翠波の家に召使はれる書生が、何う云ふ理で赤ん坊を奪つて行つたか、清野は合點が行かなかつた。

「二三度お宅へお越しになつた事もございます」

「夫にしても異しい、これには仔細があるだらう、お前は何處へも行かないで様子を見ろ乃公は石川の家の様子を探らせる」

清野としては此の他に手段が無かつた、けれど雪子にして見ると、清野が爾うした體の好い事を云つて、此の場を欺瞞かして置くより思へなかつた、住江との間に秘密な云ひ合せがあつて、表面だけを體好く繕つて置くのであらう、その疑ひが除かなかつた。

然し、その上に執念深く疑つて掛る事は爲きぬので、好い加減にして置いたが、夫婦の間に作られた白壁は次第に厚く優るのみであつた。

清野は、いかにしても不審に堪へぬので、然るべき方法の下に、石川方の模様を探らせ、すると忽然として赤ん坊の姿を石川家の奥座敷に認めたのは事實であつたが、暫くすると何れへか消え去つて、後には翠波の酔ひ頹れたる姿を見ればかりであつたこの情報に到着した、清野の不審は次第に色濃く爲り優るばかりであつた。

忽然として翠波の家へ現はれた赤ん坊が、果して玉子か何うかは分らぬが、前後の事情ど、お政が目撃した男が藤澤であつたと假定すると、十中の七八までは玉子らしく思はれる、翠波が何の爲めに玉子を奪はせたか、そしてその赤ん坊を一寸の間家に置いて、更に何處へ遣つたのか、考へるほど分らなくなる。

或は玉子が住江の舉んだ赤ん坊ではないかとも思つて見た、さつした疑ひは早くから持つて居ないではなかつたが、住江の舉んだ赤ん坊が路傍に捨てられて居る筈も無く、假し捨てられて居たにしても、それが雪子の手に拾はれたとは信じられない、あまり小説染み

た事は考へると、却て面倒な結果を見る、と思ひ返して、再びさうした奇蹟染みた事は考へないやうにして居たが、翠波の書生が突然に現はれて、横奪して行つたと聞くと、或は前の疑ひが實際であつたかも知れない、その心持を取り去る事は爲きなかつた。

「赤ん坊を何處へ遣つたか、内密に調べて見やう」

清野は獨りで斯う思つた、勿論他には云はなかつた、雪子にも語らなかつた。

「赤ん坊はどんなに爲りました、さぞ大きくなつたでございませうね」

雪子は時々こんな脈味を云つた、清野はその度に憤としたが、自分が入婿であるのを思

ひ、更に事を荒立て、雪子の心を荒ませるでもないと思つて、聞えぬ風をして居ると、雪子はいよく圖に乗つて、

「お母さんにお乳もおありなんでせうけれど、いつもお政を伴れてお行きになつては如何でございます、赤ん坊の居ない處に乳母を置いて置くのは費だと思ひます」

進んではこんな事まで云つた。

流石の清野も家の中が不愉快で堪らなくなつた、能きだけの辛抱はしたけれど、雪子

の仕打があまり露骨で執拗いので、つい樂みを他で求めるやうになつた、今まで外泊した事のない清野が、近頃ちよいと泊つて来るやうになつた。

「きつと住江の許へ行くんだ」

雪子はその度に住江を恨んだ、嫉妬が段々色濃くなつた。

住江は毎日涙の底に落ちて居た。

「明日は會はせる、明後日は伴れて来る」と永田は赤ん坊が自分の手にでもあるやうに容易く云ふが、その約束は何時の場合にも反古になつた、住江は切て聲でも聞きたいと願ふけれど、憐な、引き入れられるやうな、心を注げて聞くど、血を含んでも居るのではないかと思ふほど迫つた赤兒の泣聲を幾間かを隔てた廊下の彼方に聞いたのも、唯の一度だけであつた、もう一度あの聲が聞きたい、あれが果して自分の赤兒であるか何うかは別問

題として、頑（がん）はない泡（あわ）のやうな聲（こゑ）を聞くだけで満足（まんぞく）である、赤兒（あかご）が見たい、赤兒（あかご）の聲（こゑ）が聞きたい。

住江（すゑ）は堪（たま）りかゝて永田（ながた）に催（さい）足（そく）する事（こと）もあつた、他の事（こと）で此方（こゝ）から詞（ことば）を掛（か）ける事（こと）は無いけれど赤兒（あかご）の事（こと）だけに、優（やさ）しう呼（よ）びかけて、

「まだでございませうか、わたしの赤ん坊（あかぼう）を何時（いつ）見（み）せて下さるのでございませう」と淋（さび）しい笑顔（えがほ）さへ見（み）せて云（い）つた。

その度（たび）に永田（ながた）は苦笑（にがわら）ひして、

「もう暫（しばらく）待つて下さい、大丈夫（だいじやう）伴（ばん）れて来るよ、住（す）ちやんの赤ん坊（あかぼう）を煮（に）て食（く）つたのぢやないから、明日（あす）か明後日（あさって）は必（き）ず伴（ばん）れて来るよ、實（じつ）は少（せう）し風邪（かぜ）を冒（ひ）いて居（ゐ）るんでね」と辯（い）解（げ）らしいことを云（い）つた。

住江（すゑ）はそれがすぐ氣（き）に懸（か）つた。

「風（かぜ）を冒（ひ）いて居（ゐ）ますの、どんな容體（ようたい）ですの、大（たい）した熱（ねつ）があるのではありませんか」

「なに、心配（しんぱい）することはないさ、昨日（きのう）の朝（あさ）までは少（せう）し熱（ねつ）があつたけれど、今日はすつかり

除（ぞ）れて居（ゐ）るよ、然（しか）し、醫者（いしや）がもう二三日（にさんじつ）外（ぐわい）へ出（で）しちや可（か）けないといふから、じつと養生（やうじやう）をさせて居（ゐ）るのさ」

「そんなんでしたら安心（あんしん）ですけれど、わたし介抱（かいほう）に遣（や）つて戴（いた）くことは爲（で）きないでせうか、一日（いちにち）でも可（い）い、赤（あか）ちやんが抱（だ）きたいと思（おも）ひますわ」

「まあ、苛（いら）々（さ）しなさんな、その内（うち）に伴（ばん）れて来るよ、それとも住（す）ちやんが、僕（ぼく）の要求（ようきう）を容（い）れて呉（く）れさへしたら、今（いま）すぐ赤ん坊（あかぼう）の居（ゐ）る所（ところ）へ伴（ばん）れてつて上（あ）げるんだけれどね」

談話（だんわ）はいつもこれで切（き）れる、住江（すゑ）は赤ん坊（あかぼう）の事（こと）ばかり思（おも）つて居（ゐ）た。

最も（もつと）時には清野（きよの）の事（こと）を思（おも）ひ、双親（ふたれい）の事（こと）も思（おも）ふけれど、赤兒（あかご）に對（たい）する愛（あい）の執着（しつちやく）の深（ふか）いのに比べては、眞（ま）の九牛（きゅう）の一毛（いちもう）に過ぎなかつた、寒竹（かんちく）の繁（しげ）みに日（ひ）が落ちて、淡（うす）い暗（くろ）に蔓（は）つて行く間に清野（きよの）の顔（かほ）が浮（う）いて出る、それがいつとなく母（はは）の顔（かほ）となり父（ちち）の顔（かほ）となり、遂（つい）に翠波（すゐ）の顔（かほ）となつて、恐（おそ）しく物凄（ものすご）い目（め）でくわつと睨（にら）む、住江（すゑ）は心（こゝろ）に「濟（す）みません」などと詫（わ）を云（い）つてじつと目（め）を閉（し）ぢて居（ゐ）ると、翠波（すゐ）の顔（かほ）に笑（え）がで、自然（しぜん）に赤ん坊（あかぼう）の顔（かほ）に化（な）る。

「あゝ赤（あか）ちやん」

住江は思はず抱き付かうとして、やつと我に返る事もあつた、うつ／＼と眠る枕頭に、赤兒の姿をぼんやり認めて、夢うつゝの間に手で探ることもあつた。

「あんなにまで頼んでも、伴れて来て下さらないと云ひ、毎晩のやうに赤ン坊の夢ばかり見て居るのは、赤ン坊にもしもの事があつたのぢやなからうか、冷たくなつて地の底に眠つて居るのぢやなからうか、もし其様だつたらわたしは何うしやう」

近頃甚だしく感傷的になつた彼女は、こんな想像を胸に描いて、しく／＼と泣くこともあつた、一日も二日も箸を取らないで、掻卷に被さつて居ることもあつた。

「こんな事をして居る中に、氣でも狂はれちや大變だ」

永田は一方に藤澤を責め、一方に探偵社の手を煩はして、赤ン坊の行方を探すが、皆く要領を得なかつた、翠波の手から杉本へ渡つて、杉本が抱いて出たのは知れて居るが、その後の消息が知れなかつた。

無論、杉本の家には居ない、杉本に會つて聞いても、

「ちツとも知らない、そんな噂をする者があるのかね」と、眞面目で云つた。

然し、杉本の妻君は、國へ歸つたとか云ふので居なかつた。

(五)

伊皿子臺町の閑静な路次の中へ、二週間ほど前から移轉て来た女があつた。くつきりと肉の締つた伶俐さうな顔をして居る二十七八の婦人で、もう誕生に間の無ささうな可愛らしい女の兒を抱いて居た、近所へ配られた移轉蕎麥につけた名刺には「尾崎ふち子」と細長い紙に書かれて居た、近所は「誰かのお妾さんだらう」と思つて居た。

果して移轉の夜から、八字髭を生やした脊の高い男が来て、十二時近くまでも話して歸つた、その男は翌日も来た、またその翌々日も来た、四日目には泊つて歸つた。

「やつぱり妾だよ、それはどの女でも無いのにね」

近所の者は紅い舌を出して云ひ合つた。

ふち子は斷るまでもなく杉本の妻であつた。家に居ては、惡人どもに嗅ぎつけられる恐

れがあるので、玉子をつれて別居したのであつた。けれど本名の臈と云ふ名を呼ぶのも變だし、清野で命付けられた玉子を命けて置くのも面白くないから、夫婦で考へて、改めて、「綾子」と命けた、生れて一年も経たぬ間に、三度までも名を更へなければならぬ運命の下に置かれた赤ン坊は不幸であつた。

移轉の日に頼んで置いた下婢を、口入屋から伴れて來たは五日目の朝であつた。年齢は十六と云ふが、脊も高く太つて、見るから伶俐さうな目色をして居た。

「二年ほど然る方へお小間使に參つて居りましたけれど、一月御暇を戴いてから、ずっと宅に居りました」

彼女の語る處は斯うであつた、前の主人に仕へて居た頃は、お梅と呼ばれて居たが、本名はお久である旨を付け加へて語つた。

「夫ちや宅では本名を呼ぶことにしませうね、その方がお前も答へ可くて好いでせう」と藤子は云つた。

下婢は何方でも好いと云つた。

「夫ちやお久にして置ませうね、少しは炊事の方も手傳つて貰はなければならぬけれど、成るべくはお傳がしてお貰ひしたいのよ」

「わたし、赤ちゃんが好きですから……」

「困ることはない、わたしに乳汁が無いんだよ、顔見知りはないだらうと思ふけれど、一度抱いて見ておくれ」

藤子はそこに寝かせてあつた赤ン坊を抱きあげて、お久の肥えた膝へ抱かせた、お久は抱へるやうに擁いて、つくつく顔を見た、綾子も鳩のやうな可愛らしい目を睜つて、不思議さうにお久を見た。

「奥さま、わたし此の赤子ちゃんには見覚えがありますわ」

お久は暫くすると斯う云つて、改まつたやうに綾子を見直した。

「さう、何處で……」

藤子は軽い調子で聞いた。

「それとも、彼の赤子ちゃんに似て居らッしやるのか知ら」

「お前、この赤ン坊を何處で知つて居るの」

「前の御主人様のお宅で知つて居ます」

「へえ、前の御主人様といふと……」

「中瀬谷の永田さんでございませう」

藤子は永田と聞いて、ハツと思つた。翠波の家庭を攪亂した恐ろしい手が、永田といふ男に持たれて居るのを、良人から聞いて居た。

「え、永田さん……」

「でも、奥さまのお嬢様で在らっしゃるのでございませう」

「それはねえ、わたしの娘と云へば娘なんだけれど、爾うで無いと云へば爾うでない理もあるの、斯う云ふと何だか曖昧してるやうにお思ひなんだらうけれど、これには少し込入つた事情があるの」

「すると、わたくしが知つて居りますのは、やつぱり、此のお嬢さまなんでございませうか」

「さあ、其處のところは何うなのかね、まづお前の話から聞かうぢやないか」

藤子は如才なく問ひ掛けた、お久は永田の別荘で、住江に同情した小間使のお梅であつた

(三)

お久は、永田の別荘内で見聞きた有のまゝを物語つて後、

「このお嬢さまが其の赤ちゃんでございましたら、臈さまとか被仰るのでございませうよ」と云つた。

「あゝ、爾うなの、するとお前が前に知つて居るのは此の赤ン坊に違ひない、永田さんの御別荘に居た赤ン坊が、どうしてわたしの家へ來て居るのか、何れ理は話すけれど、お前も此の兒について知つて居るだけの事は話して呉れなけりやなりませんよ」

「えゝ、わたしの知つて居ますことは、何でもお話し致します」

「それぢや、此の赤ン坊のお母さんも知つて居るでせう、眞個のお母さんも……」

「はい、知つて居ます」

「其方は何處に居らつしやるの」

ふち子は、杉本が知らうと望んで知り兼ねて居る住江の消息を、お久の口から知らうとした。

「今は何方に在らつしやるのでございますか、わたくしそこまでは存じません、彼の奥さん、眞成にお可憫さうでございましたわ、可愛い赤兒ちゃんも奪られてお終ひなさいまし、淋しい一室へ押籠められて、毎日厭なことはかり聞かされて在らつしたんでございすから、わたくし恚様者ですけれど、一生懸命に御同情申上げて居りました」

お久は當時の恐しかつた事、寂しかつた事、悲しかつた事の數々を思ひ出して、睫毛に露を滲ませた。

「すると、赤ン坊は奥さんの手を離れて居たと見えるわねえ」

「左様でございますとも、初めてお入來になりましたときは、赤兒ちゃんと御一所でございましたけれど、五六日致しますと、赤兒ちゃんも永田の旦那様がお引上げになりました

奥さまばかりが寒竹のお庭を控へた六疊の御座敷に淋しくお暮し遊ばして在らつしやいました」

ふち子は、住江の悪い事、悪い噂のみを杉本から聞かされて居たので、永田との間にも獸類に近い厭な關係が結ばれて居るであらうと推量して居た、赤兒を捨て、自分ばかりが寒竹の室に残つたのは、血を分けた小供よりも、まだ可憐い物があるからであらう、と思つて居た、それで詞を進めて、

「奥さんと永田さんとは何様にしてお暮しになつて居るの」と訊いて見た、すると意外にも、

「奥さまは死んでも永田の旦那様の自由にはならないと被仰つて、どんなにか悲しい目にお逢ひ遊ばしたでございませう、斯う申しては何ですけれど、旦那様随分執拗いのでございすから、奥様はほどにお可憫さうでございました」と云ふ立派な返答を聞いたとき、ふち子は我が耳を信じないやうに、

「それぢや、永田さんと奥さんとの間に、爾うして關係はちつとも無かつたんですね」と

訊き直した。

「そんな事はちツともございせんわ。それですから旦那様の在らッしやらない間に、そつと裏門から逃げてお終ひなすつたのでございますわ」

「ぢや、住江さん、もう永田さんには在らないのか知ら……」

「在らッしやいせんども、わたくし御供をして出たのでございしますもの……彼から何方へお行でになりましたのか、其の邊は分りませんけれど、永田様の御別荘に在らッしやら……事は確でございます」

「永田さんの御別荘へ伺ふことは爲きないの」

そこまで訊き質して置いたら、何かの補足になるであらうと、ふち子は思つた。

「でも、表面お暇を戴いたのではございせんから、伺つて伺へないことはないだらうと思ひますけれど……」

こんな話をして居る中に、赤ン坊が泣出したので、お久は立つて外へ出た、ふち子は其處に結ばれた不思議な因縁を考へながら、

「良人が来らしつたらお話し爲なきやならない」と思つて居た。

(三)

「あなた、不思議なことがありますよ」

ふち子は杉本の面を見るなり云つた、夜も九時を過ぎて、綾子はすやくと蚊帳の中に眠り、お久は洗湯へ行つて不在であつた。

「不思議な事つて何様事かね」

杉本は巻煙草を薫らせながら、男の力の籠つたよく光る目を妻に向けた。

ふち子はお久に聞いた顛末を語る、杉本は驚いて、

「成るほど不思議だ、それだから悪いことは爲きんと云ふのさ」

「近頃翠波さんは何様御様子で在らッしやいます」

「翠波には困つたよ、住江には彼した事情から別れて終ふ、赤阪の玉子には脊中を向けら

れる、悲境から悲境を辿つて、今は常識の存在さへ疑はなけりやならぬやうになつて居るまづ極度の神経衰弱だね」

「何うかして元のお身體にお爲りなさる事は爲きないのでございませうか」

「乃公も随分骨は折つて居るが、人間も彼様になつては手が付けられない、然し、何處までも綾子を自分の子と思ふかしてわしの面さへ見ると、赤ン坊を頼む／＼と涙を流して云ふ、わしは夫が可憐さうだ、初めは清野の胤らしいと云つて、深い疑ひを置いて居たが、近頃になつて急に執着を増して來たのは、何か感じたことがあると見えるよ」

「それで、住江さんに對して、そんな感じをお持ちなすつて在らしツやるのでせうねえ」

「そこは分らんよ」

「もし、住江さんがお歸りにでもなつたら、ちつとは御心が沈着くかも知れませんか」

「おれも爾う思ふ」

「どうでせう、お久を永田の別荘へ遣つて見ては、一たん逃げ出した住江さんがまた元の別荘へ歸つては居ないでせうけれど、もしかしたら目下の模様を知ることが爲きるかも知

れません、わたし住江さんを疑つて居ましたけれど、可愛い居兒ちやんを奪られてまで、堅く操をお守りになつて居たと聞いて、眞個に有難い貴い方だと思ひました、もしお久の云ふ通り、首尾好く永田の手をお免れなすつたのでしたら、すぐにも翠波さんの許へお歸りにならなければなりませんのに、その後御行方の知れないのを見ますと、永田の追人に引き戻されてお終ひなすつたのかも知れないと思ひます」

「大きに爾うだ、然し、お久が永田の別荘へ行くだらうか」

「わたし都合好く頼んで見ます」

「それで住江さんの行方を知ることが爲きたら、翠波の現在を救ふ道があるかも知れないよ」

杉本は何處までも翠波の同情者であつた。

「もし住江さんが今も永田の手に押籠められて、悲惨な生活の中に、操を守つて在らしやるのでしたら、女として立派な方ぢやございませんか」

「無論さうだ、さうなつたらわしも謝罪をしなきゃならん」

「あなた、翠波さんの御意をお聞き遊ばしては如何でございます、翠波さんが御納得になつて、住江さんが永田の別荘に押籠められて在らっしゃるのでございまして何と申して助け出す工夫がありさうなものぢやございませんか」

「大きに爾うだ、ぢやこれから翠波を尋ねて見やう」

「此から……こんなに遅く……」

「お前はお久を説いて置け、乃公は翠波の決心を聞いて来る、住江が濁りのない水で、翠波がその水を再び盆へ復さうといふのだつたら、有爲な青年畫家が根本から救はれる、こんな芽出度いことはない」

「ぢや爾うなすつて頂戴よ」

「諾し」と杉本は立ち上つた、そして赤ン坊の顔をちよつと見て、足早に出て行つた。

(三)

翠波は今日も酒を呷つて居た、五十萬に近い黄金の力も、彼に一瞬の満足を與へることが爲さなかつた、これを生命と思ひ詰めて居た一管の筆も、彼に最後の慰藉を與へるだけの力はなかつた。

その中で、多少でも彼の心に満足を與へるものは酒であつた、寂しい茶の間に閉ぢ籠つて、彼は朝から酒を呼んだ、もし彼の周圍に酒が無かつたら、彼は疾に死んで居たであらう、彼の命は酒であつた、同時に、彼の命を破壊して行くものも酒であつた。

杉本はお梅に就ての報告を讀ませて午時少し前に訪ねて來た、翠波は朦朧とした目を睜つて全世界に二人とない親しい友の姿を見た。

「おれの目を見て呉れ、おれの此の目を見て呉れ、曇つてやしないか、どうか」
杉本は圓い面を翠波の前へ持つて行つた。

「別に曇つてるやうには見えない」翠波は眞面目な顔で斯う云つて、

「何だか異な事を云ふぢやないか」

「爾うかねえ、曇つてやしないかねえ」

「君はまた何故そんな事を聞くのかね」

「此の目で見損つたものがあるからさ、自分では大丈夫と信しながら、實際見損つたものがあるからよ」

「ふむ」と翠波は氣の無い返事をして、前に盃の餘瀝を切ると「どうだ、一ばい飲まんか」と云つた。

「今日は君の爲めに大盃を舉げて祝福すべき日かも知れない、では」と愉快さうに盃を受けて「浪々受けやう」

「僕の爲めに祝すべき事とがあるのかね」

「大いにある、僕は君の爲めに謝罪をしなきゃならない、人間の目も當にならんものだなあ」

「何うして？」

「翠波、恕してくれ、僕の目を恕してくれ、僕の心を恕してくれ、僕は住江さんを見損つて居た、金剛石を硝子玉以下に見て居た、恕してくれ——」

翠波の酒に荒んだ目が活々と動いて來た、然し直には信じないで、

「ば、ば、馬鹿な、そんな事は何うでも可い、もう一つ續けたまへ」

「いや、實際だ、僕は住江さんの胸底に、それは堅固な貞操觀念があらうとは思はなかつた、實際のところ、僕は住江さんを腐れた肉と思つて居た、名は君の細君でも、魂は他へ行つて宿つて居るものと信じて居た、處が大違ひ、僕は不思議に嬉しい便りを聞いたんだ」

「ふむ、住江が……」

斯う問ひ返した翠波の顔に、秘しても秘されぬ觀喜の色が浮いて見えた、けれど夫は見る／＼薄く悄えて行つて、

「駄目だ／＼、あんな者に貞操觀念はない、彼奴は人間の皮を着た動物だ、僕を谷底へ突き落した悪人だ」

「處が爾うでない、君は住江さんが、現在何處に居るか知つてやしまい」

「知つては居ないが推量は付いて居る、どうせ清野の袖の下に隠匿はれて居るんだらう」

「處が大違ひ、住江さんは君の許から誘拐されて、恐ろしい色魔の手に押へられて居るぞおれは確な者から聞いた」

「ふむ、ちや、何處に……？」

「中澁谷の永田とか云ふ奴の下に抑留されて居るさうだ、それなら何うして赤ン坊が清野の手へ落ちて居たかと異むだらう、然し、夫には仔細がある、追てその事情は打ち明けるが、こゝに先決問題として、まづ君の覺悟を聞かなければならんことがある、もし住江さんが僕の聞いた通り、さうした苦境へ沈みながら、堅固に貞操を打ち續けて居たのだたら、君は元の夫婦になるか、住江さんをここの家庭へ迎へるか、それとも再婚はしない意か、眞正の事を云つてくれ、僕に一寸考へがある」

杉本は斯う云つて、翠波の顔の色を伺つた、翠波は見る／＼目に一ぱいの涙を潑へたが、言葉は無く杉本の手をぐつと握つて、おゝおゝと泣き出した。

(五)

「逃げるやうにして暇を取つた永田の門を潜るのは、お前もさぞ嫌だらう、けれど萬々一住江さんが元の一室へ引き戻されて在らッしやるやうだと、何様にしてもお助けしたいと思ふから、お前様子を見に行つておくれでないか、さうして住江さんをお助けすることが爲きたら、どんなにかお喜びなさるか知れない、お前が斯うして綾子の許へ來てくれたのも、前の世からの因縁だらうと思ひます」

ふち子は良人の意に體して、お久の前に手を支く如く云つた、お久は少女ながら深い同情を住江の境界に掛けて居るので、

「えゝ、宜しうございます、わたし一度永田さんへお謝罪に出なければならぬと思つて居た所ですし、もし奥さんが引き戻されて在らッしやるやうでしたら、一寸御様子も見たいと思ひますから、素知らぬ面して參つて見ませう、旨く參るか何うか其の邊は解りませんけれど……」と詞強く引受けた。

ふち子はお久の詞を頼母しく思つた、年齢こそ若いけれど、此なら何様大事を打ち明けても、間違ひはないと信用した、そこで良人から言はれて居る事（住江が居たら此方で救助の道を講じるからその心構へをして居る事、その時に用ひる合圖その他の打合せ、赤ン坊は無事に翠波の手へ戻つて居る事等）を詳しく語つて、

「どうか都合よく頼むよ」と云つた。

お久は委細を呑み込んで、その日の夕暮に永田の別荘を訪れた、玄關から案内を乞ふ身分では無いから、臺所口からそつと入ると、恰度そこに仲働きのお松が居て、

「おや」とお久の顔を見るなり云つた。

「ごうも御不沙汰をして済みません、わたし圖々しく上れた身分では無いんですけれどもお久は面を被つて云つた。

「お前さん、まあ何うしたの、誰にも沙汰無しで逃げ出したりなんぞして……」

「旦那さま、さぞ御立腹なんでせうねえ」

「お前さん、時が惡かつたのよ、何う云ふ理で逃げ出したのか知らないけれど、お前さん

が逃出したと同じ日に、奥さんも何處かへ行つて了つたのよ、だからお前さんが奥さんを手引をして、伴れ出しでもしたやうに疑ひを掛けて在らしつたのよ、随分迷惑だわねえ」
お久はお松のこの詞を聞くと、ほつと胸を撫でおろした。

「旦那様、そんな事を思つて在らつしやるのですか」

「だけどもね、奥さんがお歸りになつてから、お前さんとは關係のない事を詳しくお話しなすつたさうで、今ちや大分解つて在らつしやるけれど、一時はお前さんに何様餘波が掛るかも知れない所だつたよ」

「まあ、爾うですか」と大袈裟に驚いた風を見せて「それで旦那様はお宅なんですか」

「恰ど可い處、今日はお留守」

お久は先幸が好いと思つた。

「實はわたし、旦那様へお謝罪に來たんですが、ごうでせう、お恕しになりませうか」

「さうねえ、今ちやお疑ひも晴れて居るやうだから、そんなに難しいことは被仰るまいと思ふけれどもね、いよ／＼となればわたし等も口添へをして、何とか都合よく治めはする

がね」

「どうかお願い申します」

お久は眞剣らしく云つた。

「今日は緩々遊そんでお在で、お鶴さんは居ないけれど、蕎麥でも驕つて上げやうぢやないか」

「ごうも有難う、それで奥さんは何方に在らッしやるのでございます」

「例のお座敷さ」

「やつぱり……すると旦那さまのお望みはまだお協ひなさらないのですね」

「奥さんも随分豪情よ」

「一寸お尋ねしちや可けないでせうか」

「可からうともお前さん」

「それぢや御機嫌伺ひをして來ます、その内にござり御馳走をお願い申しますよ」
お久は軽く戯言口を云ひながら、廊下傳ひに住江の居間へ進み入つた。

(五)

お久は踏む足も廊下に付かぬほど苛々して、案内知つた住江の室へ駈け付けた、ふち子の頼みはあり、自分も氣に掛けて居た住江の消息を訊くのであるから、有らゆる事情を打ち捨て、來はしたが、鬼ども悪魔ども譬へやうのない永田が何様難題を持ち掛けるかも知れない、それが何様結果になるかも知らない、假へお目に掛けることが爲きるにしても、容易の業ではあるまいと思つたのが、案外易々と望みを遂げる事が爲きそうなので、お久は感謝の念に驅られながら、六燭光ほどの薄暗い電燈がぼんやりと點いたばかりの室の中を伺つた。

七月に入つてからめつきりと暑くなつて、襖も障子も開け放してあるので、廊下から奥の間までを一目に見る事が爲きた、電燈の光りに戦ぐ寒竹が憂々と風に鳴り、それに揺られてぼとり／＼と落ちる露がさながら螢のやうに輝く庭の様は以前に渝らない、室の模様も元の姿そつくりであるが、その奥の間の縁端近くに坐つて居る住江の變り果てた姿を見

るこ、情に脆いお久の胸はまるで板のやうになつた。

住江はそこへ唯一の同情者が来て居るとも氣付かず、一心に兩掌を合せて何かを祈念するらしかつた。お久は敷居の中へ一膝進んで、

「奥さま」と聲掛けたが、住江は振り向かうともしなかつた。

「奥さま、御不沙汰致します、奥さま、奥さま」

斯う續けさまに呼んで奥の間の取り合せまで膝行り寄つたとき、住江は祈念から心を離して、きつと背後を振り向いた、お久はその顔を一目見て、脅かされるやうに吐胸をついた、それは住江の顔に人間らしい影が一つも浮いて居ないからであつた。

目は抉つたやうに凹んで、濃い睫毛がその上に被さつて居る、頬の肉はげつそりと落ち白い齒が瘦せた唇から尖つたやうに凸くなつて、心の寂しさが口許を深く鎮す、唯變らぬは三日月形をした眉毛だけで、氣の所爲か頭髮まで薄くなつたやうであつた。

「おゝ、お前さんは」

住江は斯う呼んで、お久の側へ縋り寄つた、お久はおろ／＼して、

「奥さま、あなた……」

此だけ云つたが後に續く詞は無かつた、住江は瘦せて骨と皮ばかりになつた手で、お久の手頭をきつと握つて、

「よく来てお呉れだつた、わたしお前さんの事は忘れやしない、禮を云ひます、禮を云ひます」斯う云つて、手を取つたまゝ目の縁へ持つて行つた。

「あなたまあ何う遊ばしたのでございます、暫くお目に掛らない間に、大そうお賽れ遊ばしたのでございせんか、それに……一たん……」

「わたしは殺されます、どうかして只一目赤ン坊が見たいと願つたけれど、之れさへも協はない、好い處へ来ておくれだつた、お前さんのお蔭で、一度は逃れて出たけれど、やつぱりわたしは劫人です、わたしに好い日は照りません、暫くすると引き戻されて、こんな目に逢つて居ます、もうわたしの住む世界はない、お前さん後生ですから、わたしがこゝで責め殺されたことを、わたしの實家まで知らせては下さらないでせうか、この前お世話になつて、まだお禮も致しませんで、またこんな事をお願いするのは、眞成に濟まないど

思ひますけれど……」

「奥様」とお久は強い聲で呼ぶと握られた手を握り返して「御心配なさいますな。わたしはあなたをお助けに來たのです、あなたに同情して在らっしゃる方が、今のわたしの御主人でございます」

「え、助けに來て下さつた、それは誰方です、お前さんの御主人は誰方です」

「もし清野さんちやありませんか」と云ひたいのを呑み込んで、住江は詞急しく訊いた。

「それは尾崎ふち子さまと被仰る方でございます」

お久はふち子の本性が杉本であるのを知らなかつた、同時に、杉本の妻が今の所へ別居して居るのである事も知らなかつた、彼女は表の標札に書かれてある姓名のみを知つて、それを住江に知らせたのであつた。

「尾崎さん——尾崎ふち子さん——」

住江は聞いた事のない婦人の名を聞いて考へた。

「伊皿子鑒町に在らっしゃいますわたくし、その方に召し使はれて居ります、それに不思議なことがあるぢやございせんか、奥様のお嬢さまが、そのふち子さまの御手許に在ら

ツしやるのでございますよ」

「え、わたしの赤兒ちやんが……」

「え、奥さまのお嬢さまが……わたくし最初お目見得に參つて、お嬢さまのお顔を見ましたとき、何様に吃驚したのでございませう」

「わたし夢ぢやないか知ら、わたしの赤ン坊が何うしてそんな方の御厄介になつて居るのか、お前さん、詳しい事を聞いて居ない？」

「詳しい理は存じませんけれど、大さう奥さまに御同情なすつて在らっしゃいます」

「尾崎ふち子さま、わたし些ども承はつたことの無い方なんだがねえ」

「何れ近い中に、何とかしてお助けに來らっしゃるでございませう、その時あなたが不意を食つて狼狽へたりなんぞ遊ばしては可けないから、わたしに其の事をよく申上げて參るやうと被仰いました、さうしてその時は……」

お久が進んで合圖其他の方法を語らうとするとき、彼方に足音が聞えたので、慌てゝ口

を嚙んで、袂から袂へ紙に認めたものを渡した、もしゆつくり談話をする餘裕が無かつたら、そつと渡さうと思つて認めて來た紙片が忽ち役に立つたのであつた。

住江はお久の厚意を袂に受けて、そのまゝ縁側へ身を避けた、お久はすぐ話を換へて、相變らず涼しい風が吹きますこと、此方に居りますと、眞成に暑さ知らずでございますわねえ」

「それでも晝間は堪らなく暑いことがあるわ」

「やつぱり夏でございますからねえ」

「おほゝゝゝ」「はゝゝゝゝ」

二人は故意と付けたやうな笑ひ聲に落ちる處へ、お松は涼しさうな硝子の鉢へ氷を盛つて持つて遣つて來た。

「奥さん、吃驚なすつたでせう、珍らしい人が來たでせう」

「眞成ねえ、暫く見ぬ間に大人らしくなつたんで、わたし見違へつちまつたわ」

「さうでせうとも、わたしでさへ何處の別嬪さんかと思ひましたわ」

「否ですよ、冷かしちや」

「その割にして氷でもお喫りなさい」

「あら、お蕎麥を騙つて下さるのぢやなくつて」

「お蕎麥は好い人と世帯を持つたとき、お前さんの方から呉れるのですよ」

「わたし、其様事知りませんわ」

「まあ何でも可いからお喫りなさい、奥さんも如何でございます」

住江とお久とは素知らぬ顔で氷を喫つた、お松も側で相伴した。

お久は一時間ほど話をして歸つた、お松は近所まで見送ると云つて出た、住江は後でお久から受け取つた紙片を出して見た、それには先刻お久に聞いた事が細々と書いてあつて、その末に、

「あなたの御座敷の寒竹の庭へ、桔梗の花を投げ入れます、それは何時だか分かりませんが、くれぐれその桔梗の花は當方に總の用意が調きて、あなたのお迎ひに參るのをお知らせする

のです、ですからあなたは桔梗の花を御覧なさると共に、その心積を爲すつて下さい、そして可い頃に切戸口を開けて下さい、時は夕方です、無論永田の居ない時を選びます」と書いてあつた、住江の爲めには眞にまたどない福音である。

住江はまたその次を読んで見た。

「あなたは安心して、此方に任せて置いて下されば好いのです、鬼の住家さへお出ましになれば、あなたの世界は開けて來ます、赤兒ちゃんにも逢はせます、お父さんにもお母さんにも、石川さんにも逢はせます」

この筆の跡に心切が溢れて居た。

「こんなにして下さるのは誰方だらう」

住江はつく／＼考へた、

お梅の話した尾崎ふぢ子といふ人に馴染は無い、それが何うした事情でわたしの赤ん坊を育て、居て下さるのか、わざ／＼お梅を寄越して下さつた、其の邊の経緯はよく分らぬけれど、この中に書かれてある石川云々の文字に由つて石川家に縁故のある御婦人であらうとの推量だけは付く、それだと心から御厚意を受ける理に行か行かないか、よく考へて見ねばならない。

住江は一刻も早く魔の手から免れたかつた、けれど翠波の手に由つて救はれるのは嬉しなくなかつた、彼女の魂は別の世界を翔けて居た、赤ん坊には深い／＼執着を持つて居るけれど、翠波には未練がない「濟まない／＼、良人に對してすまない」とは絶えず思ふが水のやうに冷たくなつた愛情を回復する道はなかつた。

それに永田は赤ん坊を伴れて來ることに由つて、住江の満足を得やうと努めて居る、住江は赤ん坊を一目見たら、その目を永久に瞑らうと覺悟して居た。然もその赤ん坊は思ひも掛けぬ人の手に抱かれて居る、永田はそれを知つて居るか、恐らく知つては居ないだらう、知つて居ないから伴れて來ないだらう。

「わたしが今日まで貞操を持ち續けたのは全く赤ん坊のお蔭である、赤ん坊を伴れて來たらと云つた詞が、強い力になつて永田との間を引き分けて呉れたのである、何といふ孝行兒だらう」

斯う思ふにつけて顔が見たい、呼吸も詰まるほどに抱きしめたい、苦しい義理に迫られたら、清野は思ひ切る事が爲きやう、けれど赤ん坊は思ひ切れない、桔梗の合圖を待つて魔の手を遁れ出ることが、幸福か何うか分らぬ、こゝで斯うして一命を終つた方が、わたしの爲には眞正の道かも知れない。

思ふと翠波さんに濟まない、お父さんに濟まない、三方四方の人に濟まない、けれどこゝに斯うした生活を送つて居るので、わたしの義理は繋がれて居られる、わたしがもし外に居たら、此の上恐しい罪を犯して居るか知れやしない、今日までの事を考へると、この位の苦痛を受けるのは有理である、それが石川に縁故のある人の手で助けられて、わたしの身が立つであらうか、赤ん坊を抱く歡びはあつても、義理に縛られる苦みはないであらうか。

彼女は心から迷惑した、そこに救ひの手は下つても、それに絶つて好いか惡いか、その分別が付きかねて、幾度も板のやうになつた胸を抑へた。

「わたしは何うなつても、赤ん坊は幸福で居ておくれ、いつまでも永田の手へ渡らないで

おくれ、その内にわたしの身は何とか始末がつくでせう」

住江の思ひは遂に最後の願望へ到達した、こんな姿で清野には逢ひたくない、翠波にも逢ひたくない、父にも母にも逢ひたくない、爲きるものなら此のまゝ赤ん坊が抱いて死にたい。

住江は煩悶に煩悶を重ねて行つた、お梅が眞心で訪問してくれた事も、眞成の歡びとはならなかつた、一面に暗い心を持つたものは他の誠を受け入れる器さへない悲しみが、犂々と骨に絡んだ。

「おい、まだ生きてるのか」何時の間に來たのか永田はうしろから聲掛けた、住江は驚きして振り返つたが、その手に赤ん坊の抱かれてないのを見て安心して、

「えゝ、まだ劫が盡きぬと見えます」

と何時になく強い聲で云つた、永田は酒に温る顔をてか／＼と光らせながら入つて來た。

お久は永田の別荘から得て歸つた土産は、ふち子の口から杉本の耳へ囁かれた、一たん悪魔の手を通れた住江は、再び元の間へ引戻されて、今も悲嘆の底に沈んで居る、そして堅固に貞操を守つて居るといふ事が、いかに強く杉本の頭腦を刺戟したのであらう。

「諾し、きつと助ける」

勇氣に充ちた豪々しい語が、彼の口を迸り出た。

「翠波も住江の復歸を願つて居る、住江と赤ん坊とが翠波の手へ復つたら、翠波は新しく長閑な生活に入るであらう、その事は翠波の行動が證明して居る、俺們の手をしつかり取つて、ほろりと溢した一滴の涙が證明して居る、住江を救ふのは翠波を救ふのである、舊いことは問ふに及ばない、これが友達に對する義務だ」

杉本は斯う決心した、然し、悪魔の家深く閉ぢ籠められて居る女を救ふに、單獨の手では爲されない、さりとて金銭で雇つた人間を恃むことは爲き難い、斯う云ふ時は肉身の手を借りるに限る、住江には親がある、矢土老人といふ昔氣質の父がある、彼の老人、住江

が不義の道に奔つたと聞いて、見付次第一刀に切つて捨てるとか云つてゐるさうだが、限りのない迫害の下、恐ろしい白刃の間に、危く貞操を守つて居た住江の状態を語つたら、どんなにか歎び且つ満足するであらう、その結果は有らゆる力を傾けて、わしの計畫を助けて呉れるに違ひない、殊に首尾よく當人は盗み出しても、直に翠波の許へ連れて行くことは能きす、清野から密偵を向けられて居るわしの處へ同道するも面白くない、それについても矢土老人を味方につける必要がある。

杉本は最後の決心がつくと共に、矢土老人の許へ走つた、老人は娘の行方の知れぬのを氣に病んで、餘所目にも痛ましいほど瘦せ衰れて居た。

「矢土さん、お歡びなさい、住江さんの居所が知れました、然も達者です、早く救ひ出さねばなりません」

苛々とした中に、歡喜に満ちた聲で云ふと、老人は自分の耳を信じないやうに、

「な、なんと被仰る、住江が無事に居る、住江が無事に生きて居る？」

「そうです、御無事です、然も、悪人の手に捕はれて在らッしやる、ちツとも早く助け出

さねばなりません」

「駄目々々、本杉さん、それは駄目、わたしは今のお詞を事實として聞きたくないと思ひます、それを何故と被仰い、假し、住江が何處に何様状態で生きて居ても、わたしとしては石川に對する義務上、一日も恕しては置かれませんが、先祖傳來の一刀——錆びては居ても先祖傳來の一刀を閃かして、只一刀に切つて捨てねばなりません、ですからわたしを不憫と思召すなら、どうか彼奴の居所を知らせないで下さい、それがわたしの……」

「まあお待ちなさい、その御心配も御無用です、あなたの御心は僕もよく知つて居る、夫だけに一日も早く住江さんを救つて、あなたを歡ばせてお上げしたいと思ふのです、どうかわたしの計畫に同意して下さい」

「駄目です、彼奴は達者で生きて居ませうけれど、わたしは承知しません、身體は或は達者でも、魂は病人です、顔に元の光澤はあつても、心に光は持つて居ないでせう、彼奴は已に腐れて居ます」

「處が爾うでない、それなら助けになど行くものですか、あなたの手を煩はすまでもなく

わたしの手で呼吸の根を止めて了ひます、それが矢土さん、意外にも住江さんは清淨です惡魔に迫害されながら、今日まで貞操を守つてお在でなすつたのです、わたしはその證據を持つて居ます」

「え、え」と老人は幾度も吃つて、

「それは眞成ですか、眞成に身を穢さないで居たのですか」

「爾うです、夫だから助けねばなりません、あなたも力を貸して下さい、住江さんの居らつしやる處は墨を流したやうな暗い處です、同時に恐ろしい刃の間です」

矢土老人の目は活々と輝き出した。

「宜しい、夫なら何處へでも行きませう」

(五)

住江は待つとも無く桔梗の花の合圖を待った、知らぬ人の手に救はれるのは、彼女に取

つてあまり歡ばしいことではないが、それでも毎日一室に閉ぢ籠められて、惡魔の呵責を受けるよりは優良でなくてはならなかつた、井戸の底へ突き落されて、小さい穴から大天を見上げて居るのでは、何うする事も爲きないけれど、一たび井戸から外へ出れば、どんな幸運が降つて來ないにも限らぬ、少くも赤ン坊を袖に抱く歡喜がある、或はそれを現世で受ける歡喜の最後にして、命を捨てることがあつても後に残る心はない、同じ死ぬにも惡魔の家で死ぬよりは、赤ン坊を抱いて死ぬば、多少の満足がそれに伴ふ。

斯う思つて合圖を待つた、お梅の言葉では、永田の留守を考へねばならぬ、と云つたが永田は毎日家に居た、そして赤ン坊を見せないで、邪望を遂げる方法のみを案じて居た。けれど住江の側には近寄らなかつた。もし理不盡に暴力を用ひでもしたら、直ぐ舌を噛み切らうとする住江の覺悟がさすがの暴漢を弾き返した、永田は意地の遣り場が無くて、晝前中をば／＼雨の降つて居た日、午後の晴を待つて出かけて行つた。

住江はこんな時、合圖があれば好いが、と思つた、その心が届いたのか、日のちり／＼と暮れかけた頃、寒竹の葉に一頻り風が渡つて、葉末の露がばら／＼と落ちる間から、桔

梗の花がぼとりと投げ込まれた、住江は今さらの如く胸が騒ぐ、さては「救ひの手が來たか」と思ふ瞬間、髪の毛までが強く締つた。

「さうだ、切戸を開けて置かねばならない」

斯う思つて立ち上ると、裸ふ足を踏みしめて、庭下駄を穿くと共に、前後を見廻しながら切戸を開けた、そして急いで元の座敷へ駆け戻つて、きり／＼と帶を引しめた。

とたんに切戸口から逞しい男の手が現はれて、幾度も手招きした、夕暗はもうすつかりと庭の中を占領して、石竹の薄紅がぼんやりと見えて居た、住江はこゝぞと思ふ下から勇を鼓して立ち上つた、そして今度は洗足のまゝ駆け、切戸口から現はれて居る手頭に縋つた。

「御心配には及びません、わたしの爲る通りにして在らつしやい」

強い底力のある聲で云つて、ぐつと外へ引き出したは、緊張した顔を持つた杉本であつた。

「お、杉本さん」住江は意外に驚いた。

「何も被仰るな、わたしの手に縋つて在らつしやい」

兼て案内を究めて居たらしく、荒草の間を通つて、裏門口へ出た、そこには中折帽の底を深くした矢土老人が待つて居た。

「住江か」

「お、お父さま」

「老人お渡し爲ます」

杉本は取つて居た住江の手を矢土老人に握らせた。

「御盡力辱けない」

「早く自動車へお乗せなさい、わたしも直ぐ追ひ掛けます」

「夫ぢや宜しく願ひます」

住江はまだ夢心地から脱ける事が爲きなかつた、桔梗の花の合圖に續いて、杉本の救ひの手が現はれ、更に生の父の温い手が裏門口に待つて居やうとは思はなかつた、杉本の手を放れて、父の手に握られたとき、住江は云ひ知れの慈愛の熱が指の頭から心臓へ傳ふのを覺えた。

「さ、早く来い」

老人は宵暗の塀の外を、急ぎ足に自動車の待たせてある所へ急いだ、運轉手はそれと見ると心得て扉を開ける。

「もう心配はない、沈着いて居れ、嬪さんも歡んで待つてゐるよ」

老人は嬉し涙を溢しながら斯う云ふとき、杉本は勝ち誇つた目を輝かしながら遣つて來た「有難う、お蔭で娘の無事な姿を見ることが爲きました」

自動車は斯うした感謝と喜悦とを乗せて、飛ぶやうに駆け去つた。

自動車の爆音が、門口に止まるのを待ち兼ねて、お信は内から駆け出した、

「あなた、如何でございました、住江は無事に歸りましたか」

老人の答を待つ間ももごかしさうに、車の中をうろ／＼見た、杉本は真先に飛び出して、

「御無事です、住江さんは御無事です、さあ住江さん、御實家へ來ました、お母さんがお迎ひに來て在らっしゃいます」

「どうも有難うございます」

住江は、嬉しさと懷しさと悲しさに語の調子を亂しながら、轉ぶやうに立ち出づる。それを背後から抱へたい程にして、老人は一ぱいの笑顔を見せて出た。

「實は何うかと思つて心配しましたか、案外都合よく行きました、お話はあとでします、住江さんさぞ疲れて在らっしゃるでせう、勞つて上げて下さい」

お信は、元の面影も無く瘦せ衰れた住江の姿を一目見た刹那から止め途もなく流れ出る涙を拂ひ難ねて、濡れた面をそのまゝ頬摺さへしたさうな様子を見せつゝ、背から腋へ手を廻して、抱き擁へるやうに裡に入つた。

住江はまだ夢心地が除かなかつた、以前のまゝの座敷、元のまゝの庭、少女の時から馴染んだ百日紅が折から昇る月の光に照らされて血のやうな花の上に白い露を置いた様が、一入懐かしく目に入つた。

「お前、大さう苦勞をお爲だつたね、委細は杉本さんから聞きました、それでも無事で好かつた、お父さんも初めの間は太へん御立腹になつて居たけれど、お前が苦しい間で操を守つて居たことをお聞きになつてから、掌を返すやうに、泣いてお歡びになりましたよまあ好かつた、まあ無事で好かつた、サイタの冷めたのがあるから進げやうかね」

住江は咽喉が詰るやうで一言も物が云へなかつた、何故とも無くはふり落ちる涙の上を昔懐かしい風が吹く、舊く馴染んだ雀が、思ひがけぬ人の香をかいだのに不審して、軒端から内を覗く、住江は心に「住み馴れた所はご居心地のよいものは無い」と思つた。

そこへ杉本と老人とが打ち伴れて入つて來た。

「住江さん、さぞ吃驚なすたらう實はお久——いや、あなたの方ではお梅と云つて居たさうですが、彼の女をお手許へさし上げたはわたしです」

「まあ、左様でございましたか」住江はいよゝ意外に呆れた。

「お梅は尾崎ふち子の使のやうに云つたか知れませんが、ふち子はわしの妻です」

「すると、わたしの赤ん坊も、やつぱりあなたの御手許へ救はれて居るのでございませう」

か」

「さうです、赤兒ちゃんは翠波から預つて居ます」

「え、石川から——」

住江は聞くことが皆な意外であつた。

「夫にも事情があります、詳しい事は追てお話することにしませう、然し、都合好く行つて愉快でした、あなた行水でもなすつちや何うです、」

「わたくし、あなたが助けに来て下さると思ひませんから、初めて御顔を拜見したとき何様に喫驚したでせう、然しどうも有難うございました、御蔭さまで命を拾ふことが爲きました、それにとても現世で逢ふことは爲きまいと思つて居た兩親の無事な顔を見た事がわたくしには何れほどの歡びでございませう、夫も是も、皆な杉本さんのお蔭でございませう」

住江は兩手を疊に支いて、心から禮をした。

「いや、實際芽出度い、これからまた赤兒ちゃんにも會はせます、翠波にも會はせます、」

それが其の御姿ちや面白くない、ざつと行水をお使ひなさい、さうして髪でも結び直して心持好くお爲りなさい」

「ぢや、お湯を取つて上げませうね」

お信は歡びに満ちた身を起して行水の支度をすべく臺所へ行つた。

(K0)

住江は汗と不快と穢い垢を流して、心持ち好く淡化粧さへ施て現はれた、十ヶ月に亘る困厄と、苦勞と、不愉快と、迫害とに美しい光澤を削り取られて、元の姿は無く瘦せ衰れては居ても、斯う新しく化粧をすると、夫でも何處かに以前の面影が見えて居た、杉本は心に「こんなになつても、美しいには美しいな」と思つた、矢土老人もお信も、満足の笑を漾へた。

「今夜は此方で、緩々お寝みなすつた方が好いでせう」

杉本は暫くしてから云つた。

「然し、永田とか申す者が追ひかけて参りはしないでせうか」
 お信は心配に堪へぬ如く訊いた。

「大丈夫ですよ、まさかわたしと御老人とが、住江さんを助け出したとは氣付かないでせう、然し油断はなりませんよ」

「それはわしが引受ける」と老人は昔の腕を擦りながら、何が来やうと、再び住江を悪魔には渡しません」

「さうだ、御老人にお預け申して置けば安心だ」そこで住江さん、今夜は久しぶりにお母さんに抱かれてお寝なさるとして、明日は何ういふ行動をお取りなさる、お久の話から察しても、あなたまづ赤兒ちゃんに會ひたいでせう」

「えゝ、ちつとも早く會ひたいと思ひます」

「夫はお察しする、然し何處で會ひなさる、妻の許へお來で下さるのは關はんが、人目に掛つちや好くないでせう」

「其の心配もありますけれど、わたし赤兒ちゃんに會へるのでしたら、何處へでも参りますわ」

「いつを此處へお伴れなすつては如何でございませう」
 お信は得手勝手な事を云つた。

「いや、爾うは可けないでせう」

と杉本は眞面目な態度になつて。

「いつそ明日の晩、そつと石川の許へお歸りなさい、すれば赤兒ちゃんもお伴れします」
 住江は膝の上へ目を落して居た老人はすぐ同意して、

「夫が可い、夫が自然だ、わしはお前が長い間の迫害を凌いで、立派に貞操を持ちつづけ
 た美しい身體を、翠波さんへお返しするのが何より嬉しい、今度のことは杉本さん一方な
 らぬお骨折で、翠波さんの方も圓くお修め下すつたといふのだから、明日の晩芽出度く歸
 つて、久しぶりに親子三人川の字に寝るが可いだらう」

「すれば翠波も歡ぶでせう、我々夫婦も歡喜します」

住江は黙つて膝の上を撫で、居たが、此の時、最も苦しさうな聲で、然もその中に動かすことの爲きぬ確乎とした覺悟を籠めて、

「わたくし、石川の宅へ歸るのは望みません」と云ひ切つた。

一座に驚異の波が立つた、今の今まで住江を女神の化身の如く思つて居た矢土老人も眞成の操の上に蘇生つて、此から新しい生活に入るであらと、期待して居た杉本も、さながら自分の耳を信じないやうに、

「えッ」と問ひ返した、住江は塞れた顔の上に、淡紅の色を漾はして、

「わたくし、石川へは歸りません一生を獨身で送ります、と再び云つた。

「それは何う云ふ理か、今日まで操を守つて居ながら、良人の家へ歸らぬといふ法があるか」

老人は詞急しく問ひ詰めた。

「お父さま、お願い致します、どうか深い理はお訊ねなさないで下さいまし、わたくし決心して居ります」

杉本はさう云ふ住江の顔を穴の穿くほども見詰めて、

「住江さん、あなた本心で被仰るのですか、今になつてそんな事を被仰るつてことがありますが、あなたは石川の妻ですぞ、赤兒さんのお母さんですぞ、石川の家を措いて、外にお行でなさる所がありますか、と詰るやうに訊いた。

「皆様には心からお謝罪します、然し、わたくしは……」

住江は斯う云ひかけてはらくと涙を溢した。

(二)

「お前、心を落ち着けなきや可かんど、お前、罪の上に罪を重ねては可かんど」

矢土老人は誨へるやうに云つた。

「何と被仰つても、石川へは歸りません、石川へ歸らなければ赤ン坊を見せないと被仰るのでしたら一生赤ン坊を見なくても可いのです」

住江は切つた齒の間から斯う云つて、強い決心の籠つた目を、じつと父の上へ付けた。「お前氣が狂やせんか、今になつてそんな事を云ふ程なら、何故貞操を守つて來た、何故辛い間を凌いで來た、わしはお前の云ふことが些とも分らん」

「お父さまにはお分りになりますまい、けれどわたしには分つて居ます、石川の爲めを思召して下さる杉本さんに對しても、わたくし恁様事の云へた義理ではございませんが、辛い悲しい苦しい間で、今日まで操を守つて參りましたのは、決して石川の爲めに……」

住江はこゝまで云ひかけて、流石に口を噤んで終つた。

「怪しからんことを云ふ、するとお前は石川の爲めに貞操を守つたのぢやないと云ふのか」「口」に云へば爾うです、わたくし眞成の事を云ひますと、生きて再び石川の前へ出られた身ではございません、わたくしは……わたくしは……」と追つた聲を急に落して、

「石川に對する操は穢して居ますわたくしの身は穢れて居ます」

「すると、惡魔に穢されたのか、永田に迫害されたのか」

「いえ、永田には穢されません、迫害にも遇ひません、わたくしの操を穢しこのはわたくし

しの心ですこんな穢れた、こんな冷たい心を持つて、どうして石川に逢ふことが爲きませう、わたくし一生を獨身で送ります」

杉本は黙つて住江の言ふ事を聞いて居たが、やがて混雜した目を擡げて、

「住江さんの被仰ることは分りました、永田の迫害には抵抗したが心から恕した人が他にあると被仰るのでせう、この事も分つて居ます、然し、わたしは過ぎ去つたことを兎や角云はない、翠波も以前の事情は悉く忘れて了ふと云つて居ます、すれば宜いでせう、翠波があなたに對する總てを恕すと云ふのであつたら、歡んでお歸りなさることが爲きるでせう」

「いえ、わたくしは、何うしても恕される事の爲きの罪を犯して居ます」

「それも翠波は恕すでせう、あなたが赤兒ちゃんを愛すると同じに翠波も赤兒ちゃんを愛して居ます」

杉本は横から説きまた縦から説いた。

「杉本さんには御諒解があるだらうと思ひますから、わたくし何も彼も打ち開けて云ひま

す、成るほど操は守つて來ました、永田には指一本指させないで、長い間の迫害に堪へて來ました、けれど夫は石川の事を思ふために致したのではございません。心に誓つた或る事の爲めに、死をもつて悪魔と闘つたのでございます」

「その事情も分つて居ます、あなたが其處まで進んで被仰るのでしたら。わたしも進んでお話し爲ませう」杉本は引き緊つた顔を向けて「あなたは石川の爲めに操をお守りなすつたのぢやなくて、清野の爲めに操をお立てなすつたのでせう」

住江は無言のまゝ垂頭いた、新らしく取りあげた底髪の鬢が、心の動搖に動いた。「な、何と被仰る」

老人は聞きのがさなかつた。

「あなたは暫くお控へ下さい、斯う云ふ経緯は御老人で御解りならぬ點が多からうと思ひます」

杉本は苛だつ老人を抑へて置いて、更に住江へ膝を向けた。

(三)

「わたしが石川へ縁付いたのは間違ひでした、わたしの住む世界は外にあつたのです、わたしは何様事情があつても、再び石川へ歸らうとは思ひません、その爲めには赤ン坊も犠牲にします、お父さんの御慈愛も捨てます」

住江は涙の中から絞り出したやうに云つた、矢土老人の憤怒は油の注がれた薪のやうに燃え盛る。

「おのれ、な、な、何と云ふことを云ふ、死んでも翠波の家へ歸らないとは何だ、住む世界が違つて居たとは何だ、今一言云つて見ろ、其の分ではさし置かんぞ」

斯う云つて、床の間に立てゝあつた白鞘の一刀を取りあげた。

「幾度でも申上げます、わたくしの心は決して居ます、殺されても恨みません、石川へ歸るよりは死んだ方が優秀だと思ひます、わたくしは……わたくしは……」

住江は恐ろしい白刃の上に泣き伏した。

「よし、夫ほど死にたければ殺して遣る、杉本さんお止め下さるな」
老人は立つたまゝ、刀の柄に手を掛けた、烈火に燃え盛る憤怒の上を、冷風はそよ／＼吹く、一座はまた引締つたあ。

「あなた、まあ、待つて下さいまし」

お信は堪らなくなつて云ふと、住江と老人との間へ割つて入つた。
杉本は手を組んだまゝ考へる。

「止める勿、貴様が甘いからこんな事が起るんだ、退いてろ／＼」

「いえ、退きません、これには何か深い理があるだらうと、存じますどうか今夜だけ御猶豫なすつて下さい、わたし特と理を聞いて見ます」

畜生に理は無い、何事も聞くに及ばん、乃公は杉本君に面目無い、同時に石川へも義理が立たない、辯解にはその不幸者を切つて、此の場を去らず切腹する、止めるな」

「其様事を爲すつては、世間の物笑ひになりますよ、お殺しなさるには及ばないでせう、元の本心に立ち復りさへすれば可いのでせう、わたし克く云ひ聞けて、あなたや杉本さん

のお顔を立つやうに致します、今夜のところは預けて下さい、どうかわたしに預けて下さい……」

「お母さん、止めないで頂戴、住江は泣聲で斯う云ふと、突然と顔を擡げて、下唇を噛みながら母の顔を沈と見たが、わたしは切られます、さうしたら苦しい執着も切る事が爲きるでせう、現世の苦患も忘れることが爲きるでせう、今までも幾度死なうと思つたかも知れませんが、強い／＼執着に引き止められて、惜くない命を續いで來ました、お父さまのお手に掛れば本望です、命があつたら、何様事をするか知れませんが、此上皆様へ御苦勞を掛けましては、未だまで暗になります、お母さまへは御不幸になりますけれど、此も先世の約束事と思召して下さいまし」

云ふ下からまた泣いた。彼女の心に動かすことの爲きぬ或る物が潜んで居るのを知ると杉本は住江の心を見抜くことの爲きなかつた口惜さに戰慄した。

「住江さんのお心にこれほどの覺悟があらうとは思ひ掛けなかつた、こんな事なら慙ひお救ひ申すのぢやなかつたと後悔しても追つ付きません、實に云ひやうもない失策でした、

然し、今となつて再び永田の家へお送りする事も爲さないでせう、御老人がぶち切つて下ふと被仰るのも、平生の御氣質から推して御無理のない處です、これが昔の世界でしたらさうして面目をお保ちなさるの外、適當な手術は無いでせう、住江さんにしても殺れのがお望みでせう、けれど御老人、昔と今とは時世が違ひます、昔の刀は今の誠意です、愛の力です、昔の殺害は今の同情です、昔の血は今の涙です、昔は首と胴とを切り放すを最後の手段としたでせうが、今は間違つた心を矯め直すのを最後の手段とも方法ともします、殺す處ではない、活さねばならぬ處です、まあ、静かになさい、そして僕の云ふ處をお聞き下さい」

老人は刀を持つたまゝ倒れるやうに坐をしめた。額の膏汗がてか／＼と電氣に光つた。

(三)

杉本は清い潤みのある目を住江の上へ浴せ掛けて、

「住江さんにも同情します、あなたは最初から石川へお行でになる處ちやなかつたのです、石川もまたあなたをお迎へする筈ではなかつたのです、わたしは今日の結果をその時に見て居ましたから、石川に對つては随分手強く反對もして見ました、忠告もして見ましたけれど悲しい事に、あなたのお父さんはあなたの心の奥底を見抜くだけの眼力をもつて居らずしやらなかつた、同時に石川はあなたの美しいお姿のみを見て、お心を見ることを知らなかつた、心の盲人が二人寄り合つて、遂に斯うした暗い世界を作りあげて終びました、實際今は何うすることも爲きません、あなたのお心が其處に在るのでしたら、今夜の危険を犯すのぢやなかつたのです、危険を犯してお救ひする處ちやなかつたのです、わたし共の今夜の行動は、あなたをお助けするのやぢなく苦しめる結果に落ちました、石川やお父さんが盲人であつた如く、わたしもやつぱり盲人でした、あなたが惡魔の手にあつて貞操を守つて居らつしやるのを、石川へ對する義理からだと思つたのは早計でした、あなたの胸には赤兒ちゃん以上に愛して居らつしやる、或人の影が潜んで居るのでした、あなたの魂は疾に石川から離れて居るのでした、わたしは何故そこに氣付かなかつたでせう、

外から見ても、檻のやうに見えた永田の家の座敷には、あなたには極楽浄土であつたので、然し、今となつては何うする事も爲きません」

此まで云つて一寸語調を改めて「只困るのはわたしと石川との間です、不思議に赤ん坊が手に入つたとき、彼は何様に歡んだでせう元來赤ん坊には何等の愛も持たなかつた、あなたのお産が早過ぎると云つて其處に悪感情を持つて居たのが、何うしたものか今度は舐めるやうに可愛がります、わたしが引受けて養育をしようと思つた時は、涙を流して感謝の意を表しました、石川は悪人ぢやありません、失意の極、落膽の結果、あんな人間になつて終つたのです、然し其處に捨てるとの爲きぬ美しい情があります、芝居で見る清玄のやうな姿になつて居ながら、一掬の同情を持つて居ます、あなたに捨てられながらあなたの事を思つて居ます、赤阪と馴染んだ玉子の事は忘れても、あなたの事は忘れないで居ます、あなたのお心が夫ほど硬く他の一方に傾いて居るとは知らず、あなたが貞操を守つて居らつしやる事を語つたとき、もしあなたがお歸りなすつたら、總ての記憶を忘れて了つて、元よりは優れた美しい家庭を作る意かと聞いたとき、心の底から溢れる嬉しさを籠め

て、わたしの手をしつと握りました、さうして莞爾と笑ひました、わたしはその歡び顔を忘れることは爲きません、宜しい心配するな、きつと住江さんを救ひ出して來ると約束しました、石川はさぞ待つて居るでせう、長の間恨みと悲しみに鎖ぢられた胸を解いて、いそぐとあなたを待つて居るでせう、そこへ今承はつたあなたの本心を齎せて行つたら、彼は何様に失望するでせう、どんなにわたしを頼み甲斐のない者に思ふでせう、わたしは恨まれても諦めます、けれど其の爲に、將來のある藝術家を暗く魔の世界へ追ひ遣つて了はねばならぬかと思ふと残念です、御無理を願つて済みませんが、萬事赤兒ちゃんにお免じなすつて、わたしの男を立てさせて下さらんか、お厭ではありませうが、一たん御結婚も爲すつた間です、日陰同様の戀に泣いて、果敢ない運命の影を追ふよりは、表立つて石川の妻として、婦人の任務をお盡し下さることは爲きないでせうか、さうなれば石川も活きます、赤兒ちゃんも幸福です、従つてわたしも歡びます、御両親も必ず御満足であらうと信じます、世間では愛はご神聖なものは無いと云ひます、愛の爲めには總てを犠牲にして惜まないと云ひます、けれど日本に有り來つた義理を捨てることは爲きません

今の人が愛を貴むより以上に、日本人は義理を貴みますそこに美しい人情の發路があります、ごうかもう一度考へて下さい、日本婦人としての立場から、良人といふ者、子といふものを考へて下さい」

矢土老人は男泣きに泣き出した

「これ、杉本さんのお詞を仇やおろそかに聞くな、杉本さんのお詞には神の御心が籠つて居るぞ」

矢土老人は血を吐くやうに云つた

「まあ、あなたは黙つて在らつしやい、わたしは今情を具して、住江さんにお願ひして居る處です」

杉本に理を責めて云はれると、住江は何と云ふ事も爲さずさし垂頭いて、熱い涙を頬に傳はせた

「然し、あなたに取つても大事です、あなたのお胸に潜んで居る物をお捨て下さいとお願ひするのは、あなたのお命を奪らうとするのも同じです、ですが住江さん、日本人は義理の

爲めに進んで命を捨てるのを辭しませんよ、死んで安らかな世界へ入るのを願はないで、生きて苦むのを願ふ人もありますよ、其處をよく御推察になつて、十分考へて御覽なさい人間は考へねばならぬものです、考へて居る中に眞正の光りが出て來ます、考へないでした事には後悔が付いて廻りますが、考へてした事に間違ひは斷じてありません、切て一晩お考へなさい、わたしはまた明日にでも御返事を聞きに參ります」

杉本は静な口調で斯う云ふと、改めて老人夫婦に向つて、

「わたしは是で歸ります、今夜は静かに休ませてお上げなさい、氣の立つて居る處へ、あまり執拗くやかましく云ふのはよくありません、いくら壓へ付けても筈は必ず伸びます、要は根です、心の根です、心の根——悪い方角へ傾いた心の根を枯らす方法が肝要です、根のある間は芽を吐きます、西洋の格言に、人は己の欲するがまゝに生くべからず、神の命する處に依つて活くべし、と云ふのがあります、この詞に熨斗を付けて住江さんへ進上しませう、人間が、己の欲望をまゝに活きたら、此の世の中は何うなりませう、虎や狼を野に放つて置くのと、大した相違はない結果になりやしませんか、兎も角もお考へなさ

い、人間は義理の柵や人情の垣に圍まれて、規則正しく生きて行くのが本當です、心は自由に働いても、身體の自由に働けぬ點に人生といふ者があります、いや、長談議をしてお氣の毒でした、晩くなつて眠いでせう、今夜はお三人が久しぶりに川といふ字を形つてお寝みなさい、はゝゝゝ、大分大きな川ですな」

杉本は拭ふ事の爲きぬ哀愁の籠つた聲で、夫でも快活に笑つて去つた、老人夫婦は玄関へ送つて出る、住江は人目を恐れるので、襖の際まで見送つたばかりであつた、「何か何まで御厄介になりました、お禮の申上げやうもありません、今夜篤と云ひ開けて、あなたのお顔の立つやうに致します」老人は式臺に手を支いて云つた。

「わたしの顔はこんな顔です、立つても轉けても關ひませんが、石川だけは活して遣りたいと思ひます、同時に赤兒ちゃんを異つた親の手には掛けたくないと思へます、その邊をよく御相談爲さるが宜しい」

杉本は心切が動くやうな姿をして去つた、老人夫婦は元の座へ復る、住江は夢の如に忙乎と坐つて居た。

「わしは杉本君にすまん、あんな心切な物の分つた人がまたと一個ある理のものぢやないさあこれから談判だ、住江、お前は何うする心で居る、石川へ歸つて婦人の道を盡すか、それとも此の刃を受けるか、お前の行く道は二つしか無い、さあ、何方とも返答しろ」老人は再び白鞘を取つて迫つた、住江は襟の間へ脇を埋めたまま、一言も無く深い思案に沈んで居た。

「さあ、何うする、人間になるか、獸になるか、眞すぐに返答しろ」

お信は老人の氣色の尋常ならぬのを見て前み出て、

「あなたの如に爾う被仰るものぢやありません、わたしが篤と云ひ聞けます、今夜のころはどうかお任せ下さいまし」と據なげに頼んだ。

(三四)

老人は酒を飲んで寝て了つた、柳の葉から落ちる雫が、幽に夜の静けさを破つて響く、

「わたし、お前の苦しい胸の底を察して居ます、けれど斯うなつちや仕様がなない、あんな偏屈なお父さんを持つたのが不幸だと諦めてもう一度石川へ歸つておくれ、その内にはわたしは何とかしてお前の顔の立つやうにしますからね」

お信は風通りの好い二階座敷へ住江を伴れて上つて、さながら喘んで嘔めるやうに論じた。

されど住江は垂頭いたまゝ何も云はない、斑になつた涙の痕を夜の風が撫で、行つた。

「わたしも石川は氣に入らない、お前も知つてゐる通り随分反對も唱へて見たけれど、お父さんが向ふ見ずで、頭から惚れ込んで了つてゐるから、何うすることも爲きなかつたわね、だれど今度は一生懸命にお前の爲めを考へるから、何うかわたしの言ふことを聞いてお呉れ、夫でないど、赤兒ちゃんも可憐さうだし、お父さんも承知しないでせうから、さぞ厭ではあらうけれど、其處は死んだ意になつて……長くとは云ひません、一月か半月身體だけ歸つておくれ、で無いと結局が付くまいと思ふのよ」

斯うまで云つても、住江は啞子のやうな様で居た。

「え、住ちゃん、お前の心はわたしよく知つて居るのだから、お前の爲めに悪くはしません、頼むから肯いておくれ」

お信はまた事を分けて云つた、住江は此の時やつと暗い面を擡げて、母の顔をじつと見たが、涙の乾いた目に決心の色を見せて、

「お母さんよりは、わたしからお頼みしたいことがありますわ」と云つた。

「お前さんの頼みだつたら、わたし何でも肯いてあげます、その代り、わたしの頼みも肯いてお呉れなね」

「お母さんのお頼みよりも、わたしの頼みを前へ訊いて戴かなければなりませんわ」

「夫ちや前へ聞きませう、お前さんの頼みつて何様事？」

「わたし、命懸けのお頼みですの、お母さんが肯いて下さらなかつたら、すぐ死んで了ひます」

「大さう難しいお頼みね、全体それは何んな事なの」

「お母さん、叱りやしなくつて？」

戀は二十歳を過ぎた女の心を初初しい娘時代に引き戻した。

「叱るものですか」とお信は縮り無く開けた懷へ娘を抱き擁へるやうにして「わたしはお前の母ですよ、言ひたいことがあつたら、何でもお言ひなさるが可いわ」

「ぢや云ひます」と云つた後をまた暫く躊躇つて「お願いですから、どうか清野さんに添はせて頂戴」

住江は斯う云ふと、兩手で面を伏せてしまつた。

「まあ、お前」

流石のお信も惘れ顔で我子を見直した。

「わたし、清野さんを思ひ切ることは爲きません、清野さんにお別れしなければならぬのでしたら一思ひに死んで終ひます」

住江は心底から出る聲で云つた、お信の眉根に掛つた雲が次第に黒くなつて來た。

「そんな無理なことを云つちや可けないぢやないの、他の事なら何でも聞くけれど、こればかりは何うする事も爲きないわ、清野さんがお獨身で在らツしやるのなら、また何ぞか

方法もつけて見るけれど、歴とした奥さんが在らツしやるぢやないか、それにお子さんも……………」

「ですから清野さんと夫婦にして下さいとは云ひません、どうか清野さんの側に置いて下さいまし、後生一生のお願いでございます」

住江は斯う云ひ終ると、疊の上へ平伏してしく／＼と泣き出した、お信は自分の頼みを肯いて貰ふ處で無く、脊負切れぬほどの重荷を投げられて、返答のしやうも無く吐息した

(六五)

此方には石川翠波といふ良人があり赤兒があり、彼方には雪子といふ妻があり小供があるのに、何うして未來の縁を結ぶことが爲きやう、何ば可愛い娘の頼みでも、此ばかりは思ひ切らせねばならぬ、と知りながら、

「もし望みが協はなかつたら死んで終ひます」とまで突きつめた覺悟をきくと、愛には弱

い女親の常として無理にも肯いてやりたいと思ふ心が腹の底から動いて来る、

「お前、何うしても清野さんを思ひ切ることが爲きないの」

「え、わたし、清野さんは思ひ切れませんが、清野さんと別れなければならない時が来るのでしたらわたし生きちや居りません、わたし生きちや……」

「お前何といふ因果なものだらう妻子のある人をそんなにまで思ひつめるなんて、末始終を何うしやうつて意なの」

「わたし末の考へなどは持ちませんが、奥さんの在らつしやるのも承知です、お子さんがお在になる事も知つて居ます、けれどもそんな事を考へて居る暇はありませんわたしはたゞ清野さんが戀しいのです、清野さんの爲めになら、どんな苦勞でも厭はない覺悟で居るのです」

「お前、そんなにまで思つて居るの」

「わたしの心はお母さんも知つて居て下さる筈ぢやありませんか」

「夫は知つて居るけれども、少しは前後も考へなけりやなりませんよ、もしそんな事がお

父さんに知れて御覧、それこそ何様騒ぎが持上るかも知れません」

「ですからお母さんにお願ひしてるぢやありませんか、お母さんが肯いて下さらなければわたしは死んで終ひます、こんな結らない世の中に生きて居たつて仕様ありませんから、すぐ命を捨て終ひます」

「困るねえ、お前には、何だつてそんなに融通が利かないのだらうねえ、時節さへ来れば望みの協ふ時が来るのだから、こゝは一まづお父さんの顔を立て、石川へ歸るやうにしちや何うなの、その中にはわたし清野さんをお訪ねして、お前の心持をお傳へしやうぢやないか、で無いと清野さんもお困りなさるか知れませんかよ」

お信は解つたことを云つたが、住江に爾うした融通は無かつた、彼女の戀は純であつた何物をもつてしても染めることの爲きぬ白玉の質を持つて居た。

「いえ、清野さんの御迷惑になるやうなことは致しません、清野さんの被仰ることでしたら、わたし幾許でも忍耐します、死ぬまでに一度でもお目に掛つてわたしの心持を聞いて戴けば満足です、それまではお餐ごんでもします、どんな辛いことでもします」

「そんなにまで思つて居るのか」

と母親は我子の心が可憐しくなつた厭な男の機嫌氣種を取る事の辛い経験は、昔の家業が教へて居る、家業でさへもそれである、況して此は初々しい乙女氣に、厭な人を飽くまでも厭と思ひ、愛する人を心の底から愛するは、抑へることの爲きぬ人情の發動であらうと思ふ、それが子に對する甘い愛となり、また憐れな戀の同情ともなつて、次第に心が弱くなる。

「お前の心はそれで熱く分つてゐる、けれどももしお父さんがお訊きなすつたら、何とお答へする意志で居るの」

「わたし眞成の事を云ひます、虚言や飾りは決して云ひません」

「ぢや、清野さんに添ひたいと云ふ意？」

「え」

「そんな事を云つちや大變ですよ、夫こそ白鞘の刀が鞘走りますよ」

「わたし、命は惜くありませんわ、清野さんの爲めになら、歡んで殺されますわ」

住江の執着が深く因果付けられて居るのを知るほど、お信の同情も深く爲り行く、

「若い時には斯う一圖に思ひ詰めることがあるものだ」とつくづく思ふ、

(六六)

「昨夕いろ／＼説き聞かせて見ましたけれどもね、石川へ歸るのは厭だと云ひます、それを強て抑へるやうに云ひますと、ごんな騒ぎを起すかも知れないと思ひますんでね、大抵にして置いたのですが、暫く彼して様子を見ちやどうでせう、その中には目の覺める時が来るだらうと思ひます」

翌日お信は住江を二階へあげて置いて、老人へ斯う云つた、老人はよくも肯かすきつとなつて、

「夫だからお前は可けないよ、お前が甘い事を云ふから段々増長して終ふんだ、否も應も無い、全體石川を何だと思つて居るのだ、石川は彼奴の亭主ぢやないか、此方から勧めな

くても、自分から進んで歸るのが當然だ」

「ですけれど、爾う理窟ッぽく云ふことも爲きなからうと、わたしは思ひます、彼も長い間、悪人の手に捉へられて、やつと救ひ出されたばかりですから、氣も立つて居ませうしまた種々考へてゐる事もありませうから、三日四日はあのみ、にしてじつと落着かせた方がよくはないでせうか、わたし今になつて考へますと、石川へ遣つた事が何だか間違ひであつたやうに思はれてなりません、恁様事を云つちやまた叱られるでせうけれども……」

「ば、馬鹿なことを云ふな、石川へ遣つたのが何故間違ひだ、お前も可い年齢をして、何時までも藝者氣を出しなさんな、人間は人間の道を踏むが大事だよ」

「あなたはまた其様憎まれ口をお利きなさる、わたしは何時藝妓氣を出しました」

「今日には限らない、昨日には限らない、昔のだらしない様子がちよいと出る、いつも云ふが、家庭と待合とは根本から異つてゐるよ、殊に小供を教育するのは、雛妓や半玉を仕込むのと理が違ふよ」

「あなたも好い加減にしてお置きなさい」

お信は白い險のある目を吊りあげて「わたしは何時彼の女を半玉扱ひにしました」

「爲てるぢやないか、最初から教育の方針が違つてゐるぢやないか、だから彼様道知らずが生きて終ふ、道を知らない人間は畜生も同然だよ」

三十年四十年前の不純な経歴が、白髪を戴いた頭腦の中に動き出して、夫婦が、赤目を吊り合つた、お信も中々黙つて居ない、

「あなたは何かと云ふと、わたし一人が悪いやうにお云ひですよ、夫は昔から極つて居ます」

「またお前一人が悪いんだ、お前さへ確乎して居りや、家庭に風波なんぞ起りやしない、第一住江が石川の許へ歸らないなんて、そんな馬鹿な事を云ふものか、お前は杉本へ對する義理を知らないか、今にも返事を聞きに來たら、何と挨拶をする意だ」

「杉本さんだつて、あなたのやうに無理ばかりは被仰いませんよ、四五日の猶豫を戴いてお目に掛けます」

「そ、それが藝妓氣だ、他の厚意を無にしても、自分の都合のみを計らうとする、そこに

藝妓氣が現はれる、四五日の猶豫を貰つて何うする、四五日後に歸れるものが、今歸れない筈はない、住江に眞成の夫婦の情愛があるのだつたら、わしやお前が暫く休息しろと云つても、振り切つて歸らなければならん筈だ、それに此方があれほど云ふのを馬の耳に當る風ほごにも聞きやしない、お前の惡感化が彼奴の鴈へ滲み込んで終つて居るのだ」

「何とでも被仰い、わたしが皆な悪いのです」

お信の目から熱い涙が滲み出すと、下唇をきつと噛んで、恨めしさうに垂頭いた。

「悪いと氣が付いたら改めなさいそうして今にも杉本が迎ひに來たら、すぐ歸ることの爲さるやうに用意をして置きなさい」

「あなた夫は無理ですよ、當人が死んでも歸らないと云つてゐるものを、何うして返すことが爲きるものですか」

「お前までが爾う云つちや仕様がな、何故縛つてゐる返さない」

「あなたは眞正に亂暴ですよ」

「亂暴ぢやない、これが道だ、住江を呼べ、乃公がよく云ひ聞ける、もし夫でも否と云つ

たら、首にして渡す分だ」

老人はいよく昂奮の度を高めて來た。

(三七)

夫婦争ひの中に日が長けて、いつの間にか午砲が鳴つた矢土老人は今にも杉本が來はせぬかと思ふ苛々とした氣分を抑へ難ねて、大聲で怒鳴つたり、頼んでも見たり、雁も鳩も飛んだ舊い事を云ひ出して愚痴に近い事を口説いたりしたが、お信はもう一度住江を説いて見やうと云はなかつた、石川へ遣るのは元來お信が進まなかつた、お信の希望は何時までも住江を手許に置いて、もし事情が許すのであつたら、氣の置けない金のうんどある好男子を婿（止むを得なければ旦那）に取つて、華やかな生活を送りたいのであつた、老人が石川へ縁付けやうとした時、極力反對したのは其の爲めであつた。一たん言ひ出した事は後へ退かぬ氣象と知りながら、執拗く故障を云つたのも其の爲めであつた。

石川どの夫婦間が旨く沈着かぬのも、永田と云ふやうな生體の知れぬ男が飛び出して、住江を苦め悩ますのも、皆な自分の意志に背いて結婚した咎だとお信は思つて居た、そんな處へ二度追ひ遣つて、此の上苦務をさせるのは親の慈悲ぢやない、住江だけの縲致を持つて居たら、どんな出世でも爲きると、思ふ、それが頭腦を去らなかつた。

杉本は夕暮れ近くまで遣つて來なかつた、それだけに老人の心は一際苛立つた、彼方から來ない中に、此方から伴れて行つたら、どんなにか義理が立つだらう、と思ふので「早く〜」と促し立てた。

けれど住江の決心は翻さるべく見えなかつた、彼女の魂は例の如く清野の許へ飛んで居た、蜜よりも甘い清野の私語が、耳底に残つて居て、他の言葉を受け付けやうとしなかつた、老人が血を吐くやうに義理を説く詞も上の天で聞いて「わたしは厭です、わたしは厭です」とだだッ子が駄々を捏ねるやうに住江は云つた、老人はもう白鞘で脅す氣にも爲れなかつた。

「貴様かそんな言を云つて、乃公が杉本へ立つと思ふか、強て言ふことを肯かんとあれば

親子の縁も此れ限りだ、何處へでも出て行け、貴様見たやうな不心得者には一寸の間も内に置けない」

老人は住江を前へ呼んで怒鳴つた、昨夕救ひ出して今日すぐ追ひ出すとまで云つたら、何ほ何でも少しは目を覺ますかと思つたが、住江はそれすらも平氣で受けて、

「わたしお父様から何様御處分を受けましても石川へ歸るよりは優でございます」ときつぱり云つた。

お信の眼には「それほど嫌つて居るものを」との可憐みがすぐ動く、老人は口惜さうに齒齧をして「諾し、その答へが貴様の心の全部を語つた、貴様の魂は腐れて居る、内には置かれん、すぐ出ろ」と急々と憤怒を帯んだ宣告した。

「はい、出ます」

住江は斯う云ふより外に無かつた。

「貴様のやうな不孝兒が世に中に又ど一人あらうか、すぐ出ろ、早く出ろ」

「はい、出ます」住江は惡びれた様もなく應へて「どうも種々御心配を掛けまして、お詫

の致しやうもございません、御恩はいつか送る時がございませう、それではお父さまも御機嫌宜しく……」

「何處へでも行け、貴様は畜生だ」

「どうかお恕し下さいまし、わたくしは御兩親のお心に從ふことの爲さない不幸を悲みます」

「出ろく」

老人は無暗に怒鳴つた、住江は流石に悄悄とした姿を見せて、次には母の前に手を支いた、「お母様にも種々御心配を掛けました、お父様の御命令もございますから、わたくしこれでお暇致します」

斯う云はれると、お信は理もなく涙が出た。

「お前、お父様にお詫することは爲さないの」

「わたしお詫は致しません、わたしの世界は何處かにあるだらうと思ひます」

「ぢや、何處へ行くと云ふ當もないの」

「夫は無論ありませんけれど……」住江は潤み聲で云つたが「お母さま、御機嫌克く在らっしゃいますし、これでお別れ致します」

(六八)

老人は此まで云つたら、住江が謝罪のだらう、思つた、その期待に裏切られた遣る瀬無さを、煙草の煙に紛らせて顔を背ける、その横顔に長い別れを告げる如くそつと見て、住江は心強く立ち上つた、無論何にも持つて居ない白ちやけたようなお召の單衣に、金紗の帯を締めた淋しい姿が、夕暗の玄關へとばくと動いて行くのを見ると、お信は懷しさで可愛さと悲しさどが一時に込み上げて来て、思はず

「住ちゃん」と呼んだ、住江は引張られたやうに背後を向いた。

「ちよつとお待ち、わたしも一所に行きますから」

「まあ、お母さま……」